JAC FUKUOKA
● No.19 ●
2006年（平成18年）4月15日

●社団法人　日本山岳会　福岡支部
福岡支部報

目　次

第Ⅰ部　岡日嘎布山群調査（第１次隊～第５次隊）特集
1. ５年間を振り返って、今後を考える ―― 1
2. 日本山岳会福岡支部 岡日嘎布山群調査の軌跡 ―― 2
3. 岡日嘎布山群の山峰名 ―― 6
・山群の概要図 ―― 7
・岡日嘎布山群・山名調査表 ―― 8
・岡日嘎布山群の山々（写真） ―― 10
4. 米堆谷について ―― 11
5. 岡日嘎布山群に関係した福岡支部会員の 2006 年春までの発表記録 ―― 12

第Ⅱ部　岡日嘎布山群第５次調査隊報告
1. 第５次隊の行程表 ―― 14
2. 第５次隊植物観察報告 ―― 14
2.1 植物高度分布図 ―― 15
2.2 植物分類・産出表（草木・樹木） ―― 16
2.3 特定の種の写真と説明 ―― 19

第Ⅲ部　福岡支部「中央分水嶺踏査」報告 ―― 21
第Ⅳ部　会員活動報告
ベトナム最高峰ファンシーパン（3143m）登頂記 ―― 22

第Ⅰ部　岡日嘎布（カンリガルポ）山群調査（第１次隊～第５次隊）特集

1. ５年間を振り返って、今後を考える

No.4607
松本　徨夫

岡日嘎布山群の踏査は、2001 年から 5 年間行なっており、その概要は渡部秀樹氏がまとめた。この間の成果は、後に松本が整理したように支部報や横断山脈研究会の会誌で発表するとともに、講演もしてきた。さらに日本山岳会欧文誌 Japanese Alpine News に 3 度発表し、世界に向けて発信した。これらの活動を通じて、福岡支部の同山群に対する積極的なとりくみは、全国的に認められるようになった。

以上の成果は、横断山脈研究会の中村保氏はじめ各位、参加者一同、支部関係者のご協力に負うところが多く深く感謝する。

これまでにやってきたことは次のようにまとめられる。

１）　新しく山名を同定した。岡日嘎布山群内で 36 座 37 山名、念青唐古拉山域で 10 座。
２）　拉古村から積雪期ヒョン峰（4923m）の登頂（外国人として初）と拉古村奥部の偵察。
３）　米堆谷最奥のゲムソング峰（6450m）の登路偵察。
４）　岡日嘎布山群東端の踏査
５）　未知の谷の薪果弄巴（ｼﾝｺﾞｰﾛﾝﾊﾟ）、雪茹弄巴（ｼｪﾙﾛﾝﾊﾟ）、朗秋藏布（ﾄﾞﾝﾁｭｰﾂｧﾝﾎﾟ）などの踏査。
６）　植生と高山花卉（ｶｷ）の観察と写真撮影。
７）　その他の自然（地形・地質・動物など）や民俗学的観察と調査。

今後の行動として、努力目標を含め次の 3 点が考えられる。

第１はいうまでもなく初登頂を考えるべきである。山群域内には未踏峰はいくらでもある。神戸大学隊報告にもあるように、山群の最高峰若尼峰（6805m）は厳しい未踏峰である。その他にも登山技術に応じたそれなりの未踏峰を私なりに見ている。今後世界の登山家が注目するであろうから、早い方がよい。

第２は未探検域の踏査である。山群南側と山群主稜を南北に結ぶ峠越えが残った課題である。山群南側のルートは、1935 年のコールバックの探検以後閉ざされ禁断の地となっている。振り返れば 1960 年頃、九州大学学術探検研究会がやっと手に入れた Geographical Journal で彼の論文を読み、ビルマからチベットの夢を辻和毅氏と語ったことであった。当時単行本は入手し難く、

G.J. が貴重な情報源であった。この地を目指すなら、先ずは探検家の記録を読み勉強することから始めねばならない。主稜を南北方向に越す峠は、今でも現地の村人は利用しているが、外国人が越えていない峠がいくつもある。

これらの未探検域は、現在政治的な理由で許可取得は困難である。今後許可がとれるにしても少人数での探検がよい。さらに、そのメンバーは恵まれない条件下で経験を積んだ探検心旺盛で辛抱強い人が望まれる。敢えていうなら、今西錦司、川喜田二郎、長沢和俊氏らの、探検学、パーティー学、自然学を学んだ人で実施すべきである。心ある支部会員の出現を待つや切である。

第３は単行本の出版である。１）、２）を実行に移すにはやや時間がかかるだろう。とくに２）についてはそうだろう。だとすれば、私たちはこれまで行動し、考えたことをまとめる必要がある。現在、単行本として素稿は 8 割ほどできており、300 ～ 400 頁の図書になるだろう。この出版に対して鋭意努力しているところである。

2. 日本山岳会福岡支部　岡日嘎布山群調査の軌跡

No.9826
渡部　秀樹

日本山岳会福岡支部は東チベット・岡日嘎布山群において２００１年春、２００２年春、２００３年秋、２００４年秋、さらに２００５年夏と合計５次にわたり、山群全域における山名調査、山座同定などの地理的解明を柱とし総合的な調査を行なってきた。山群南面はインド、ミャンマーとの国境に隣接し現時点では国際的、軍事的理由などにより入域が困難であるため、おもに北面から多数の谷を西端から東端にかけて広範囲に調査を重ねた。今までの５次の調査において山名確認と山座同定ができたピークは約４０座、走破した走行距離合計は約１万２０００ｋｍに及ぶ。調査の報告は日本山岳会の『JAPANESE ALPINE NEWS』、『山』、『福岡支部報』、横断山脈研究会の『ユンシス』、『News Letter』等に随時発表した。

岡日嘎布山群という未探検域をフィールドとして選択したことは幸せであった。と同時に、調査を重ねるたびに新たな課題に突きあたり、好奇心は広がり際限がない。福岡支部の岡日嘎布山群詣ではまだ完結していないが、ここで今までの調査の軌跡をふりかえってみる。

●岡日嘎布山群の概要

岡日嘎布山群は東南チベットにあり、ヒマラヤ山脈の東端とされるナムチャバルワ(7782m)のさらに東から、南東に伸びる全長約２８０ｋｍの山脈である。６０００ｍ以上のピークが３０座近くあり、５０００ｍ以上のピークは相当な数に及ぶ。その西端はポミ(波密)県を西流する帕隆蔵布が易貢蔵布と合流したあと９０度反時計回りに曲流し、さらにロンチュ(魯郎曲)と合流し再度９０度反時計回りに角度をかえてヤルツァンポに注ぐ奇異なゴルジュ地形に当り、谷底の標高は約２０００ｍである。ラサから岡日嘎布山群西端までは直線で東に約４００ｋｍ、車道に沿うと約５５０ｋｍの距離である。東端は察隅（ザユール）県の桑曲（サンチュ、ロヒト川の上流）が南から西に流れを変えるあたりで、ラサからの直線距離は約６５０ｋｍ、成都からも約６５０ｋｍの地点である。岡日嘎布山群の東には南北方向の横断山脈があり、山群は東にゆくにつれその走向は南北方向に湾曲してゆく。

岡日嘎布山群はヤルツァンポ大屈曲部とサルウィン川の間に位置し、この間にヒマラヤから続く主稜を南北に分断する川は存在しない。岡日嘎布山群がヤルツァンポの東進を阻む障壁となっており、ヤルツァンポ大屈曲の謎と岡日嘎布山群との関連性は注目すべきである。つまりヤルツァンポとサルウィン川水系が岡日嘎布山群を避けて湾曲しており、ヤルツァンポの支流である桑曲と帕隆蔵布が山群の南と北を取り巻く源流を形成している。この地域はプレート移動と地塊ブロック運動による造山活動、さらに大河の浸食が時間的に複雑に作用していると考えられており、一面的な論理では説明できない地域である。また、ベンガル湾から湿った空気がミシミ丘陵を越えて流れ込むため大量の降雪があり、巨大な氷河と急峻な山峰群を形成するとともに、山麓に森林帯を育んでいることが特徴である。

●調査のきっかけとなった 1997 秋「雲南最北の山旅(福岡支部 40 周年記念)」

どんな事業にもはずみとなるきっかけがあるものだが、福岡支部の岡日嘎布山群調査の発端は１９９６年の福岡チョモランマ登山隊(福岡市山岳協会、池辺勝利総隊長)にさかのぼる。同登山隊マネージャーであった渡部は、登山隊に合わせたベースキャンプ激励隊を企画した。その際、雲南省または四川省から壮大な道程を経て世界最高峰に至る別隊を発案し、青藏高原に造詣の深い松本徑夫氏（青藏高原登山研究会会長）に相談し協力を求めた。松本氏の探検に対する激しい情熱に感銘を受けた渡部は共同で企画にあたることを確認したが、このときの旅はいくつかの障害もあり実現には至らなかった。

翌１９９７年秋、松本と渡部はそれ以前の雲南省、四川省、チベットの経験をもとに計画を練りなおし、まずは、昆明から徳欽まで雲南省奥地を探査する企画を日本山岳会福岡支４０周年の旅として実施した。当時、中村保氏の『ヒマラヤの東』（山と溪谷社 1996）が話題になっており触発された面々が多数参加した。この旅では徳欽で大雪に見舞われ脱出に苦労した。白芒峠に向う凍結した道で車がスリップし、あわやメコンの谷底に転落しそうになり決死の思いで脱出する場面もあった。横断山脈やヒマラヤの東の山々の魅力を体感し、この時の福岡支部メンバーがその後の岡日嘎布山群調査の中枢を担うことになる。

日本山岳会福岡支部 40 周年記念「雲南最北の山旅・玉龍雪山、梅里雪山山麓を訪ねて」

【日程】1997 年 11 月 6 日～ 11 月 18 日　【メンバー】松本徑夫、深田泰三、上岡謙一、中山健、佐々木耕二、渡部秀樹、平岡誠一郎、桑原冨彦（以上日本山岳会会員）、相羽隆一郎、相羽連子、井守克巳

①11/06　日本 / 上海（空路）　②11/07　上海 / 昆明（空路）　③11/08　昆明 / 楚雄 / 大理（約 380km）　④11/09　大理 / 喜洲 / 麗江（約 200km）　⑤11/10　麗江 / 白水村 / 雲杉併 / 麗江　⑥11/11　麗江 / 石鼓 / 虎跳峡 / 中甸（約 200km）　⑦11/12　中甸 / 幸

福 / 東竹林寺 / 徳欽（約 190km） ⑧11/13 徳欽滞在 ⑨11/14 徳欽 / 中甸（約 190km） ⑩11/15 中甸 / 麗江（約 200km） ⑪11/16 麗江 / 昆明(空路) ⑫11/17 昆明 / 上海(空路) ⑬11/18 上海 / 日本(空路)

●第１次調査 2001 年春､横断山脈からチベット高原へ「東チベット拉古氷河偵察隊」

「雲南最北の旅」から 3 年を経たころ、松本と渡部は崗日嘎布山群に着目し、かつて計画した「雲南からラサへの旅」をいよいよ実現することにした。火をつけたのは中村保氏の『深い侵食の国―ヒマラヤの東、地図の空白地帯を行く』(山と溪谷社 2000)である。この調査の発案に関し渡部は手記「幸せな探検」に次ぎのように書いた。「未踏の無名峰が無尽蔵にあるといわれれば実践すべきは登ることしかない。しかし、ここでの未踏峰の登頂はじっくり選択の期間が必要である。なんといっても無尽蔵なのだから。かといって見るだけでは物足りない。無名峰とは訪問者がいうことで地元には古くから名前があるはずだ。まずはそれを探索に行こう。こうして､日本山岳会福岡支部有志により東チベット・崗日嘎布山群調査隊という幸せな探検隊が発案されたのである」。

松本は中村保氏らから情報を得るとともに資料や地形図等を収集し、複数の情報を米国のＴＰＣ50 万分の 1 地図（のちに旧ソ連 20 万分の 1 地図）上にまとめて調査に備えた。この松本がまとめた地図は雲南省大理からチベット自治区ラサまで広範囲に網羅し､その後の崗日嘎布山群調査行における礎となった。

この第１次調査の成果は大きく分けて 3 つある。①雲南省デチェン・チベット族自治州からチベット自治区ラサまで 2000km を走破し、横断山脈からヒマラヤに続く山岳を広範囲に見聞したこと､②崗日嘎布山群の拉古氷河を中心とする高峰を然烏鎮政府のチニ・ワンドイ氏等の地元の信頼のおける人々に解説してもらいながら調査ができ、山群山名調査の基本が出来あがったこと､③米堆（ミードゥイ）谷と奥の未知の高峰を確認し今後の調査課題としたことなどである。

山名探索方法は実際に見える山を指し、あるいは、指す山が混同しやすい場合はスケッチを取り実際の山と双方を指して、その場所で最も信頼がおけそうな人物から聞き取る。そして反復し、より近い発音に近づけカタカナとローマ字で表記する。そして地形図（主に旧ソ連 20 万分の 1 図、中国波密県 25 万分の 1 図等）から山座同定を行なう方法をとった。この山名調査方法がその後も定着している。しかし、難しい問題もあり後の調査で間違いに気付く場合も多々あった。同じ山でも見る村により山名が異なり山名が地方の方言の発音を含んでいる場合、本来意味するラサ標準的チベット語とどちらで表示するかなどの課題は現在も残っている。

第 1 次調査ではキャンプの用意がなかったため、谷の奥へのトレッキングはできなかった。課題となった米堆谷に関し、渡部は手記に次のように書いた。「やがて谷が大きく開けた。氷河浸食されたＵ字谷の奥に巨大な懸垂氷河を抱き、親指をつき立てたような鋭峰が現れた。明るい谷には白色の縦旗がたなびき、ネパールのランタン谷を彷彿させる。(略)この谷は時間をかけて調査する価値がありそうだ。おそらく１０数ｋｍで谷奥に達するはずである。後ろ髪を引かれる思いだが次の機会の課題とし先を急いだ。」

未知の高峰や谷を探る興奮、そこに生きる民の素朴な営みは、我々をとりこにした。第 1 次調査によって我々は、崗日嘎布山群の魅力に完全にとりつかれた。

第１次調査､横断山脈からチベット高原へ「東チベット拉古氷河偵察隊」

【日程】2001 年 4 月 22 日～ 5 月 8 日 【隊長】松本徑夫【隊員】深田泰三､上岡謙一､中山健､佐々木耕二､渡部秀樹､渡邊美代子(以上日本山岳会会員)､牟田勇､石田有三､相良幸子､中村美千代 【現地スタッフ】[雲南側]ガイド:金君太 MR､小卓瑪 MS(中甸のみ)､ラム MS(徳欽のみ)､ドライバー:①彭 MR､②熊 MR､③阿青 MR､④阿雅 MR [チベット側]ガイド:王千春 MR､チニ･ワンドゥイ MR(拉烏のみ)､スラヤンゾー MS(拉烏のみ)､ドライバー:①ジャプケ MR､②ドチ MR､③ププ MR､④タシ MR

①4/22 福岡 / 上海（空路） ②4/23 上海 / 昆明（空路） ③4/24 昆明 / 中甸（チョンデン 3280m）（空路） ④4/25 中甸 / 幸福 / 金沙江 (2000m) / 白芒峠 (4293m) / 徳欽（ドーチン 3250m)（約 190km） ⑤4/26 徳欽 / メコン川 (2150m) / 塩井（ヤンジン）・チュズカ温泉 (2350m)（約 120km） ⑥4/27 塩井 / 紅拉（峠 4220m) / 芒康（マルカム 3880m)（約 120km） ⑦4/28 芒康 / メコン川 (2650m) / 東達拉（峠 5008m) / 左貢 (3770m) / 邦達（バンダ 4075m)（約 270km） ⑧4/29 邦達 / 業拉山（峠 4618m) / サルウィン川 (2,730m) / 八宿 (3300m) / 安久拉（峠 4415m) / 然烏（ラウ 3840m)（約 200km） ⑨4/30 徳母拉（デモラ）手前 4540m 地点まで往復（約 80km） ⑩5/01 拉古（ラグ 4100m) 村往復（約 80km） ⑪5/02 然烏 / 米堆谷入口 / 松宗（ソンゾン）/ 波密（ポミ 2740m)（約 130km） ⑫5/03 波密 / 最低所 (2050m) / 色季拉（セチラ 4,510) / ハー（パーイー 3025m)（約 250km） ⑬5/04 ハー / 工布江達（ゴンボギャムダ 3400m)（約 130km） ⑭5/05 工布江達 / 米拉山（ミラ峠 5030m) / 拉薩（ラサ 3650m)（約 250km） ⑮5/06 拉薩滞在 ⑯5/07 拉薩 / 成都 / 上海（空路） ⑰5/08 上海 / 福岡（空路）

●第２次調査 2002 年春､「崗日嘎布山群調査トレッキング」

第２次調査はキャンピングの装備、食料、そしてラサから専属キッチンスタッフを同行させネパール式トレッキングスタイルでのぞんだ。第 1 次調査で課題となった未知の谷、米堆谷の氷河の山々、そして拉古氷河周辺の未踏峰の本格的な調査を行うために、トランシット(測量用器具)とＧＰＳ(経緯測位器)を持参し、経験のある佐々木氏と中山氏を中心に測定を担当し山座同定を行なった。

米堆谷では入谷をめぐり障害が生じ谷入口(3600m)で２泊を余儀なくされたが、その後谷内部の米堆村(3750m)でキャンプをすることができ調査を行なった。おそらく外国隊としてはハンベリー・トレーシーの探検から約７０年ぶりではないかと思われる。米堆氷河の氷河湖、エンドモレーン周辺まで偵察し、拉古氷河に抜けるルートやゲムソング峰(6450m)等を観察した。拉古氷河に抜ける峠（ドゥラ）は昔利用されており 3 日ほどで拉古村に達していたと村のウジェ老人は話してくれた。米堆氷河の山岳についても多くの山名調査と山座同定を行なうことができた。しかし、予定外の時間も費やしたため上部にキャンプを延ばすこと

ができず、天候にも恵まれなかったため、ゲムソング峰等の登路について宿題が残った。

拉古氷河側では氷河舌端のエンドモレーン下部にＢＣ(3970m)を設け、拉古村(4100m)にて山名調査と山座同定を行なった。さらに拉古氷河左岸(渡部)と右岸(中山、佐々木、上中)に分かれて拉古氷河周辺の山岳へのルート偵察を行なった。渡部は左岸のツォシ峰(5298m)の南稜線を巻いた4300m地点から右岸の脊梁の山岳を観察し、拉古氷河下部の南に位置するヒョン峰(当時は5699m峰と認識していたが実際はその東の4923m峰であると3次隊で判明)は比較的短い日数で容易に登れそうであること、またこの山頂からは主峰・バイリーガ（若尼6805m）をはじめ崗日嘎布山群脊梁の全貌が眺望できるだろうと推測し、次期調査にヒョン峰登頂を提案した。

今回までの調査は９７年秋の雲南省での降雪を反省とし２次とも春季に行なってきた。しかし厚い雲に阻まれ山頂部が観察しにくいこと、天候も安定しないことから崗日嘎布山群に関しては秋季が適していると考えた。

第２次調査「崗日嘎布山群調査トレッキング」

【日程】2002年4月19日～5月4日　【隊長】松本徑夫【隊員】上岡謙一、中山健、佐々木耕二、渡部秀樹、渡邊美代子、森山幸美、上中俊治(以上日本山岳会会員)、牟田勇、大熊たか子、陣内禮子　【現地スタッフ】ガイド：王勇MR、何娟MS(ラサのみ)、ドライバー：①タシMR、②ドチMR、③ジャチMR、④ププMR、ナムチェMR(トラック)、コック：ダワMR、ゲサンMR

①4/19　福岡／成都（空路）　②4/20　成都／拉薩（ラサ3650m）（空路）　③4/21　拉薩／羊八井(4320m)／拉薩　④4/22　拉薩(3650m)／米拉山（ミラ峠5030m)／工布江達(3400m)／八一(3025m)(約380km)　⑤4/23　八一(3025m)／色季拉（セチラ4510m)／最低所(2050m)／波密(2740m)(約250km)　⑥4/24　波密(2740m)／松宗(3050m)／米麦（ミメイ)／米堆谷入口ＢＣ(3600m)　⑦4/25　米堆谷入口滞在（米堆谷入村交渉）　⑧4/26　米堆谷入口ＢＣ(3600m)／米堆村Ｃ１(3750m)／米堆氷河湖(3890m)／米堆村Ｃ１(3750m)　⑨4/27　米堆村Ｃ１(3750m)／然烏(3920m)／ヤンツォ水車小屋キャンプ(3950m)(約60km)　⑩4/28　ヤンツォ水車小屋(3950m)／拉古氷河ＢＣ(3970m)／拉古(4100m)村／拉古氷河ＢＣ(3970m)　⑪4/29　拉古氷河調査　1.右岸調査　2.左岸調査　⑫4/30　拉古氷河ＢＣ(3970m)／然烏／松宗／波密(2740m)(約170km)　⑬5/01　波密／色季拉(4510m)／八一(3025m)（約250km)　⑭5/02　八一／工布江達／米拉山(5030m)／拉薩（ラサ3650m)（約380km)　⑮5/03　拉薩／成都（空路）　⑯5/04　成都／福岡（空路）

●第３次調査 2003年秋、「崗日嘎布山群調査トレッキング」

２００３年１１月、第３次崗日嘎布山群調査隊として、拉古村と米堆村にそれぞれＢＣを設営し、主に以下の３つの視点から調査を行なった。過去の２次（ともに春）があまり天候に恵まれなかったため今回は秋の調査とした。調査中は晴天が続き大きな成果があった。１０月からバイリーガ峰に遠征していた神戸大は悪天続きだったとのことなので、我々が１１月を選んだことは幸運だった。

①北東部から山群脊梁線のパノラマ山座同定

八宿県と察隅県の境界にある徳母拉（デモラ）付近の４地点からのパノラマをつなぐことにより、最高峰バイリーガ峰から連なる崗日嘎布山群脊梁の１３峰の写真撮影と山座同定を行なった。その内山名の確認ができたのは４峰であり、他の山峰名はまだ不明のままである。これらは拉古村、米堆村から望見できないため無名峰と思われる。

②ヒョン峰登頂と拉古氷河側より氷河最奥部の同定

拉古村の西に位置し、拉古氷河上流部が望まれるヒョン峰(4923m)に２つのキャンプを経て４隊員(中山、渡部、佐々木、宮原)が登頂した。それにより拉古村とヒョン峰山頂から拉古氷河の最奥部に位置するドジザンドイ峰(6260m)等を確認した。また、ヒョン峰の東、標高約4200mの地点に、手持ちの地図上にはなかった湖、ヒョングンツォを発見した。我々は当初ヒョン峰を5699m峰と認識していたが、今までの山座同定が地図上で一山ずつ西にずれていたことが判明した。つまり5699m峰はシュビーナ峰であり、ヒョン峰はその東の4923m峰であることで今までの謎が解けた。

③米堆氷河側より氷河最奥部の同定

拉古氷河の北東に境をなす米堆氷河を北の米堆谷から東支谷の約4500m地点まで登り(中山、佐々木、藤野、宮原)、ハモコンガ峰(6260m)とゲムソング峰(6450m)を確認し、同隊が推定していた拉古氷河からのドジザンドイ峰と米堆氷河からのハモコンガ峰が同一の山であること等を解明した。またゲムソング峰等の登路について考察した。

日本山岳会福岡支部崗日嘎布山群調査第３次隊

【日程】2003年11月10日～11月30日　【隊長】松本徑夫、【副隊長】中山健、【マネージャー】渡部秀樹【隊員】佐々木耕二、渡辺美代子、辻和毅、藤野忠臣、宮原信彦【現地スタッフ】ガイド：クンガMR、ギェンツェン（山下創太郎）MR、ドライバー：①ニマMR、②ツェリンMR、③ウィドゥンMR、ナムチェMR(トラック)、コック：ダワMR

①11/10　福岡／成都（空路）　②11/11　成都／拉薩（ラサ3650m）（空路）　③11/12　拉薩(3650m)／米拉山（ミラ峠5030m)／工布江達(3400m)／八一(3025m)(約380km)　④11/13　八一(3025m)／色季拉（セチラ4510m)／最低所(2050m)／波密(2740m)(約250km)　⑤11/14　波密(2740m)／松宗(3080m)／恩巴（ウーバ)／然烏(3920m)(約180km)　⑥11/15　然烏／拉古(4100m)村ＢＣ(約40km)　⑦11/16　拉古村ＢＣ(4100m)／ヒョングンツォ／Ｃ１(ユオンチョゲ4400m)　⑧11/17　Ｃ１(4400m)／ヒョン峰山頂(4923m)／Ｃ１／拉古村ＢＣ(4100m)　⑨11/18　徳母拉(4920m)方面から脊梁の山座同定　⑩11/19　拉古村ＢＣ(4100m)／ペイラ（安久拉4415m）／八宿（パシュ3400m)(約130km)　⑪11/20　八宿(3400m)／米堆谷入口キャンプ(3600m)(約120km)　⑫11/21　米堆谷入口キャンプ／米堆村ＢＣ(3750m)　エンドモレーン往復　⑬11/22　米堆村ＢＣ(3750m)／Ｃ１　⑭11/23　Ｃ１／米堆村ＢＣ(3750m)　⑮11/24　米堆村ＢＣ(3800m)／米堆谷入口／松宗／波密(2740m)(約100km)　⑯11/25　波密／色季拉(4510m)／八一(3025m)（約250km)　⑰11/26　八一／パソンツォ(3464m)／工布江達(3400m)(約210km)　⑱11/27　工布江達

/米拉山(5030m)/拉薩(ラサ3650m)(約280km) ⑲11/28 拉薩滞在 ⑳11/29 拉薩/成都(空路) 21.11/30 成都/福岡(空路)

●第４次調査 2004 年秋､「崗日嘎布山群調査トレッキング」

前半は２隊に別れ､それぞれ米堆谷の未踏峰ルート調査と､山群東部の未知の谷から東端の高峰までの地理的調査を行なった。後半は山群中部から西端までの谷と山峰の調査を行なった。

●東端の６３２７ｍ峰の実在を確認

今まで未知であった崗日嘎布山群東端の６３２７ｍ峰を確認し写真撮影に初めて成功した(辻、渡部)。観測地点は察遇県古玉(クーユイ､サンガチュゾン)村の北の山麓を登った地点(北緯 29 度 10 分 34 秒､東経 97 度 11 分 53 秒､標高 3490ｍの地点)で､南西の方角に 3 つのピークと氷壁を持つ巨大な台形の山塊を確認した。この山塊域周辺は､19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてパンディット A-K､ベイリー､キングドン・ウォード､コールバック､ハンベリー・トレーシーらが､また近年では中村保､永井剛両氏が踏査している。我々が初めて存在を確認したのかという点は､辻の詳細な文献調査により､写真はもとより報告や地図への記載は記録として残っていないことが検証された。観測点には放牧などの人跡が見られたので近郊の村人は山名を持っていると予測されるが、今回接触ができなかったため無名峰のままである。将来、察遇県が開放されることになれば古玉村から北西の谷に入り､北東面からのアプローチするルートが注目されるだろう。

●米堆谷とゲムソング峰

米堆谷では、西氷河のモレーン上 4200m 地点まであがり、未踏峰(ゲムソング 6450m など)の登路を多方面から偵察した。また、ハンベリー・トレーシーの探検の間違いも発見した。彼が「Black River of Tibet」でカンカールラモ峰として発表(J.Hanbury-Tracy,1938)した山は、ゲムソング峰であることを確認し、同山の東８ｋｍに位置するハモコンガ峰(ハモカンカールとも発音し、白い雪の女神の意)と混同したのではないかと推定した。新知見を重ねながら、村民との信頼関係も益々深まりこの谷は福岡隊ゆかりの谷となりつつある。2004 年に帕隆蔵布にコンクリートの橋が架かり米堆村のＢＣまで車で入ることができた。ぼつぼつ訪問者も来るようになったが､まだ道路は崩壊しやすい。

●未知の谷と南面へ越える峠の調査

米堆谷の西のシンゴーロンパ(谷､新果弄巴)とシュルーロンパ(谷､雪茹弄巴)におそらく外国隊として初めて入り､谷の奥部の山岳等を確認した。

また、現在でも崗日嘎布山群を北から南へ越えて行き来のある峠を確認した。調査の結果ユイプー(玉普)郷からのケパロンパ、ダシン村からのジンルーロンパ(金珠弄巴)、シュワ村からのシュワロンパ(縮瓦弄巴)とスイロンパ(随弄巴)が現在も夏の間北面へのルートとして利用されていることがわかった。さらに､20 世紀前半の探検家､ベイリー､キングドン･ウォード､コールバック､ハンベリー・トレーシー､ダビット＝ネールらの文献に登場するダシン村､シュワ村の現在を調査した。どこも文化大革命等でのゴンパは破壊され､無残であるが､草原と岩と雪の峰､森林にはカラマツの黄葉が混じり､南チロルの山村のような牧歌的な風景は､当時となんら変わらないと思われる。

日本山岳会福岡支部崗日嘎布山群調査第４次隊

【日程】2004 年 10 月 31 日～11 月 15 日 【隊長】松本徑夫､【副隊長】中山健､【マネージャー】渡部秀樹､【隊員】佐々木耕二､辻和毅､渡辺美代子､山本博(以上日本山岳会会員) 牟田勇､相良幸子､陣内禮子､田渕栄子､生田昌子､冨永文子。【現地スタッフ】ガイド:ギェンツェン(山下創太郎)MR､レンゼンドルチェ(レンド)MR､ドライバー:①ガマ MR､②タッチン MR､③ツァワン MR､④ウィドゥン MR､⑤ラクパ MR､チョンダ MR(トラック)､コック：ダワ MR､トゥプケ MR､プション MR､ニマ MR

①10/31 福岡/成都(空路) ②11/01 成都/拉薩(ラサ 3650m)(空路) ③11/02 拉薩(3650m)/米拉山(5030m)/工布江達(3400m)/八一(3025m)(約 380km) ④11/03 八一(3025m)/色季拉(4510m)/最低所(2050m)/波密(2740m)(約 250km) ⑤11/04 波密(2740m)/松宗(3050m)/茶如(チャロ 3100m)/米堆村ＢＣ(3750m)(約 120km)

■Ａ隊：米堆氷河の未踏峰偵察(中山､佐々木､生田)

⑥11/05 米堆村ＢＣ(3750m) 滞在 米堆谷偵察 ⑦11/06 米堆村ＢＣ(3750m)/Ｃ１ 米堆谷偵察 ⑧11/07 Ｃ１滞在 Ｃ１より上部の偵察 ⑨11/08 Ｃ１/米堆村ＢＣ(3750m)

■Ｂ隊：山群東部の調査(松本､渡部､辻､渡辺､山本､牟田､相良､陣内､田渕､冨永)

⑥11/05 米堆村ＢＣ(3750m)/然烏(3920m)/徳母拉(4920m)/察偶県古玉往復後/巴学(3650m)ＢＣ ⑦11/06 巴学ＢＣ/古玉村の東斜面往復/徳母拉/然烏(3920m) ⑧11/07 シンゴーロンパ(新果弄巴)の踏査 ⑨11/08 シュルーロンパ(雪茹弄巴)踏査/米堆村ＢＣ(3750m)

■Ａ隊Ｂ隊合流

⑩11/09 米堆村ＢＣ(3800m)/玉普/松宗(3050m)ＢＣ(約 60km) ⑪11/10 松宗/达興(ダシン)/波密(2740m)(約 40km) ⑫11/11 波密(2740m)/パカ(巴卡)ゴンパ/縮瓦(シュワ)/魯郎(3400m)(約 150km) ⑬11/12 魯郎(3400m)/色季拉(4510m)/八一/工布江達/米拉(5030m)/拉薩(ラサ 3650m)(約 480km) ⑭11/13 拉薩滞在(チベット大学と懇親会) ⑮11/14 拉薩/成都(空路) ⑯11/15 成都/福岡(空路)

●第５次調査 2005 年夏､「崗日嘎布山群調査(植物観察)」

第５次隊は崗日嘎布山群のデモラ(徳母拉)、拉古、米堆周辺で植物観察を中心に調査を行った。デモラではサウッスレア・ゴッ

シピフォラ(和名：ワタゲトウヒレン、雪蓮)、メコノプシス(ケシ)科の花々をはじめ貴重な植物を観察することができた。また、岡日嘎布山群へ至るまでのコンボ地方においても、米拉、色斉拉および、かつてキングドン・ウォードがＢＣとしたトゥムバツェ村など広範囲にわたり植物観察を行った。

日本山岳会福岡支部岡日嘎布山群調査(植物観察)

【日程】2005 年 7 月 24 日～ 8 月 7 日【隊長】松本徑夫、【隊員】上岡謙一、中山健、佐々木耕二、辻和毅、平岡誠一郎、下田泰義【現地スタッフ】ガイド：ギェンツェン（山下創太郎）MR

①7/24　福岡 / 成都（空路）　②7/25　成都 / 拉薩（ラサ 3650m）（空路）　③7/26　拉薩 (3650m) / 米拉山 (5030m) / 工布江達 (3400m) / ハー (3025m)（約 380km）　④7/27　ハー (3025m) / 色季拉 (4510m) / 最低所 (2050m) / 波密 (2740m)（約 250km）　⑤7/28　波密 (2740m) / 松宗 (3050m) / 然烏 (3920m)（約 180km）　⑥7/29　徳母拉の調査　⑦7/30　徳母拉の調査　⑧7/31　然烏、朗秋村、米堆谷の調査、波密 (2740m)　⑨8/01 波密 / イゴンツォ / 魯朗 (3400m)（約 150km）　⑩8/02　魯朗 / トゥムバツェ (3400m)　⑪8/03　魯朗 (3400m) / 色季拉 (4510m) / ハー (3025m)（約 100km）　⑫8/04　ハー / 工布江達 / 米拉山 (5030m) / 拉薩（ラサ 3650m）（約 380km）　⑬8/05　拉薩 / 成都（空路）　⑭8/06　成都滞在(台風による欠航)　⑮8/07　成都 / 福岡（空路）

別隊番外編

2004 年夏、別隊として渡部らがコンボ地方の高山植物観察を行い、レウムノビレ(セイタカダイオウ)、ボンボリトウヒレン、メコノプシス･プライニアナなど多くの貴重な高山植物を観察した。しかし、時期と地域が限定されていたため、２００５年夏に第５次隊として、本格的な植物観察を行った。

また、2005 年 11 月渡部らは別隊で、ラサから成都までの川藏公路沿いを中心に車で 3100km を走破した。ヒマラヤ東端のナムチャバルワから横断山脈最高峰のミニヤコンカまでを望み、ヒマラヤから岡日嘎布山群、そして横断山脈へと至る山岳と地域を見聞した。これによって、ラサ、昆明、成都から岡日嘎布山群への道を線としてつなぐことができた。

冒頭でも述べたように、岡日嘎布山群という未探検域をフィールドとして選択したことは幸であった。と同時に、調査を重ねるたびに課題に突きあたり、好奇心は広がり際限がない。福岡支部の岡日嘎布山群詣ではまだ完結していないが、今までの調査・研究の結果を集大成することも課題である。現在、探検史も含め専門的分野ごとに執筆中で、学術的記録としてまとめる予定である。

3. 岡日嘎布山群の山峰名

No.4607 松本　徑夫・No.9826 渡部　秀樹

岡日嘎布山群は、ヒマラヤ山脈と横断山脈の間にあって、念青唐古拉山脈東部の南側に位置している。その西端はヤルンツァンポの大屈曲点近くにあって、ナムチャバルワ (7782m)、ギャラペリ (7294m) と対峙している。山群は西北西から東南東に伸びており、総延長はおよそ 280 kmの山脈で、東端は察隅である。鋭鋒、秀峰が連綿と続いており、6000m峰が約 30 座、5000m峰が 160 ～ 170 座ほどあり、2006 年 3 月現在すべて未踏峰である。このなかで調査開始前に山名があったのはわずか 10 座ほどである。

この未探検域は、詳細な地図が中国の国家機密であるため、山名不明なピークが多い。そこで私たちは、2001 年から今日まで現地の村人が呼称する山名の聞き取り調査を行なってきた。漢文字で記された山名があっても、チベット語の発音に合わせた漢文字訳で示しているため、真の発音や山名が判りにくい。

山名の聞き取り調査に当たっては、できるだけ正確を期すように注意している。例えば現地では複数の村人から聞いたり、こちらの発音を訂正してもらったり、スケッチや前年の写真を見せて山峰と山名を確認するなどである。さらにチベット語発音の意味まで聞き取るようにつとめた。

山名調査には、辻和毅氏が大いに協力してくれた。また私たちは、2002 年から日喀則（シガチェ）国際旅行社のコンガさんや、ギャンツェンさんがガイドとして同行してくれた。コンガさんは英語ができるので、山名の発音を横文字で書いてもらうこともあり、大変重宝した。これらの皆さんに感謝したい。

こうして新しく知りえた山名は、岡日嘎布山域で 36 座の 37 山名（同じ山で２山名をもった山峰があるため）、念青唐古拉山域で 10 座 10 山名である。紙数の関係で詳細は省略して、山名調査表と概念図を示すにとどめる。なお岡日嘎布山群の山峰のＮｏ.と概念図のＮｏ.はそれぞれ対応している。

岡日嘎布山群概念図
Kangri Garpo Range,
Xizang(Tibet), China.
Map by investigation of
Fukuoka Section of Japanese Alpine Club

岡日嘎布山群・山名調査表

日本山岳会福岡支部・岡日嘎布山群調査隊
松本徳夫・渡部秀樹編(2005.12)

NO	地域	山名	ローマ字	標高(m)
01	徳母拉	チョマ	Choma	5614
02	デモ・ラ	ジェルンバ(リルンバ)	Jelungba(Rilungba)	6150
03	康沙 カンサ	ベンゲン	Benggen	4681
04	然烏 ラウ	ドジ・ツェンザ (ドルジェ・キェンツェン)	Dojitsengza (Dorjegentsen)	5662
05	拉古	ツオシ	Tsashi	5298
06	ラグ	ヒョン	Hiyong	4923
07		シュビーナ(シュビラ)	Schuvina(Schuvila)	5699
08		ザッド (ジャッドウン)	Zyaddo (Zyaddong)	5903
09		ゴン・ペマ	Gongpema	5367
10		ゴン・ヤダ	Gongyada	6423
11		ゼ	Zeh	6127
12		ドジ・ザンドイ (ドジ・ザンドゥイ)	Dojizangdoi (Dojizangdu)	6260
13		ゲニ(ギェニン)	Geni(Gyening)	5325
14	～トーン (拉古のカルカ)	シャナ ツェリンラゾム マラツェデュップ	Syana Tseringlazom Maratsedup	5593 5150±
15		ポンレ(ポンリ)	Pongle(Pongri)	5700±
16		トンコーレ(ドガレ)	Tongkole(Doggale)	5700±
17	然烏 ラウ	テイギ	Teigi	5322
18		ドイ	Doi	5207＊
19		メンレ	Mengle	5246＊
20	米堆	ゲニ・クッツ	Genikutz	6100±
21	ミードゥイ	ゲム・ソング(カンカルラモ)	Gemsongu (Kangkarlamo)	6450
22		ハモ・コンガ(ヒャモ・コンゲ)	Hamokongga (hyamokongge)	6260
23		ノイ	Noi	6300±
24		スレトッパ	Suletoppa	5420
25	宗巴 ソンパ	ガイシャン・コンラ	Gaisyankongla	5870
26	邃巴 ダバ	ポム・ペソン (プモ・ペン・スン)	Pomobezon (Pumobensung)	東 5000± 中 5740 西 5800±
27	松宗 ソンゾン	ユダ	Yuda	5783
28		リガ	Riga	5643
29		パンテン・ラモ	Pangtenglamo	4930
30		デル・ポラ	Delupola	6230
31		リスン・ガンポ	Risumgangpo (Riskmgongpo)	5442
32	大興 ダシン	ソンド・ペリ	Songdoperi	5180
33		シンギ・カンラ	Shingikanglha (Senggeikanglha)	5680
34	徳巴 ドバ～	ドゥポ・アリ・モナ	Dupoalimona (Dupohalimona)	5400±
35	多洛 ドロ	セジョ・ネモ・ツンドゥン	Sejopomopundun	5684
36	巴卡 パカ	カン・ジャ・ナリパ	Kanjanaripa	5631
37	索通 サトゥン	ラルンパ	Ralungpa	5250±

標高は旧ソ連地図による
＊は中国波密県地図による標高(旧ソ連地図に高度なし)

・表の番号は地図上の番号と符合している

岡日嘎布山群・山名調査表

日本山岳会福岡支部・岡日嘎布山群調査隊
松本徑夫・渡部秀樹編(2005.12)

NO	地域	山名	ローマ字	標高(m)	意味・別名等	山名確認状況等
01	徳母拉 デモ・ラ	チョマ	Choma	5614		2001　デモ・ラ現地青年 デモは元気の意(2003 ｸﾝｶﾞ氏)、2004 ｵﾙﾄｲ村人
02		ジェルンバ (リルンバ)	Jelungba (Rilungba)	6150	西藏冰川(1986)のゲニ (ﾘﾙﾝﾊﾞなら村の山の意)	
03	康沙 カンサ	ベンゲン	Benggen	4681		2004 シュデン・ゴンパの僧侶
04	然烏 ラウ	ドジ・ツェンザ (ﾄﾞﾙｼﾞｪ・ｷﾞｪﾝﾂｪﾝ)	Dojitsengza (Dorjegentsen)	5662	護法尊ﾄﾞﾙｼﾞｪ・ｷﾞｪﾝﾂｪﾝ ｼｭﾃﾞﾝｺﾞﾝﾊﾞのﾕﾗ(土地の神) Kingdon Ward(1934)のﾄﾞﾙｼﾞｪﾂｪﾝｶﾞ、ﾄﾞﾙｼﾞｪﾂｪﾝｼﾞｪﾝ	2001 然烏人民政府職員 次仁旺堆(ﾁﾆﾜﾝﾄﾞｳｲ)氏 ｽﾗﾔﾝｿﾞｰ氏 及び拉古村人より確認
05	拉古 ラグ	ツォシ	Tsashi	5298	４つの湖の意	
06		ヒョン	Hiyong	4923	ﾀﾗ尊の化身、なだらかな山の意、ﾁﾍﾞｯﾄ暦5/15祭	2002 拉古村人 ｿﾅﾑﾁｮﾝﾋﾞ青年 ｻﾞﾗ氏
07		シュビーナ (シュビラ)	Schuvina (Schuvila)	5699		
08		ザッド (ジャッドゥン)	Zyaddo (Zyaddong)	5903		
09		ゴン・ペマ	Gongpema	5367	5367m峰かどうか？	拉古は「９つの峠」の意 (2003 ｸﾝｶﾞ氏)
10		ゴン・ヤダ	Gongyada	6423		
11		ゼ	Zeh	6127		
12		ドジ・ザンドイ (ドジ・ザンドゥイ)	Dojizangdoi (Dojizangdui)	6260	拉古氷河地域のユラ 米堆からのﾊﾓ・ｺﾝｶﾞ峰	
13		ゲニ (ギェニン)	Geni (Gyening)	5325		2002 拉古村人
14		シャナ ツェリンラゾム マラツェデュップ	Syana Tseringlazom Maratsedup	5593 5150±		2003 拉古村民 (チェンベイ少年)
15	～ トーン (拉古のカルカ)	ポンレ(ポンリ)	Pongle(Pongri)	5700±		2005 拉古のタト氏とその息子ソナム・チョンビ少年
16		トンコーレ (ドガレ)	Tongkole (Doggale)	5700±	拉古村のユラ	
17	然烏 ラウ	テイギ	Teigi	5322		2001 然烏湖にいた青年
18		ドイ	Doi	5207＊		
19		メンレ	Mengle	5246＊		
20	米堆 ミードゥイ	ゲニ・クッツ	Genikutz	6100±		2002 米堆村人 スナン・プンツォ青年 ウジェ老人
21		ゲム・ソング (カンカルラモ)	Gemsongu (Kangkarlamo)	6450	意味は不明 (Tracy, 1938, 1940 による)	
22		ハモ・コンガ (ヒャモ・コンゲ)	Hamokongga (hyamokongge)	6260	ハモ尊(女尊)降臨の意か？ 米堆村のユラ 拉古からのﾄﾞｼﾞ・ｻﾞﾝﾄﾞｲ峰	
23		ノイ	Noi	6300±		2003　米堆村人
24		スレトッパ	Suletoppa	5420		
25	宗巴 ソンパ	ガイシャン・コンラ	Gaisyankongla	5870		
26	達巴 ダバ	ポム・ベソン (プモ・ベン・スン)	Pomobezon (Pumobensung)	東5000± 中5740 西5800±	三人姉妹	2001 現地の青年

27	松宗 ソンゾン	ユダ	Yuda	5783	土地の象徴(ﾕﾙﾀﾞ)の意 2004 までは「イダ」で餓鬼の意(ﾎﾞﾝ教)だとしていた。	ソンゾンゴンパのラマ僧 2001 トテチチョ氏 2002 ナワンツチン氏 2003 グンサン氏 ナワンツチン氏 2004,2005 ナワンツチン氏 ソンゾンは「3つの谷が集まる所」の意
28		リガ	Riga	5643	白い山の意	
29		パンテン・ラモ	Pangtenglamo	4930	護法尊パルデン・ラモ (観音菩薩の忿怒尊ゴンポの従者である女尊)	
30		デル・ポラ	Delupola	6230	男尊	
31		リスン・ガンポ	Risumgangpo (Riskmgongpo)	5442	(リスクム・ゴンポ) 三名主(観音菩薩、文殊菩薩、金剛手菩薩)	
32	大興 ダシン	ソンド・ペリ	Songdoperi	5180		2004 大興村ﾆﾏ・ﾜﾝﾄﾞｩｲ老人 大興村村長 ペンバ・ツェリン氏 ゴンダ(棍達)村人 ティンレン・デンゼン氏
33		シンギ・カンラ	Shingikanglha (Senggeikanglha)	5680	森格日(ｼﾝｶｰﾘ波密県地図)、大興のユラ、雪の獅子(Sengge)、雪の神の意	
34	徳巴 ドパ～	ドゥポ・アリ・モナ (ドゥポ・ハリ・モナ)	Dupoalimona (Dupohalimona)	5400±	黒顔の魔人(ハリ尊)の意	
35	多洛 ドロ	ｾｼﾞｮ・ﾎﾟﾓ・ﾌﾟﾝﾄﾞｩﾝ	Sejopomopundun	5684	セジョの7人姉妹の意	
36	巴卡 パカ	カン・ジャ・ナリパ	Kanjanaripa	5631	嘎日(波密県地図)、 パカのユラ ﾅﾘﾊﾟ尊(ｾﾞﾝ)の雪山の意	2003 古郷村人 2004 パカゴンパの僧 アツェ氏
37	索通 サトゥン	ラルンパ	Ralumgpa	5250±		2003 索通村人

標高は旧ソ連地図による
＊は中国波密県地図による標高（旧ソ連地図に高度なし）

念青唐古拉山脈側の山名調査表

日本山岳会福岡支部・崗日嘎布山群調査隊
松本徑夫・渡部秀樹編(2005.12)

NO	地域	山名	ローマ字	標高(m)	意味・別名等	山名確認状況等
01	米堆	チャッガ	Chagga	5300±	白い石の意	2003 米堆村人
02	松宗 ソンゾン	ニャンポ・トレ	Niyangpotole	5424	トチチェンボに五体投地の行を行う菩薩	ソンゾンゴンパのラマ僧 2001 トテチチョ氏 2002 ナワンツチン氏 2003 グンサン氏 ナワンツチン氏 2004,2005 ナワンツチン氏
03		ドンゾ	Dongzo	4961		
04		トチチェンボ	Dochichengbo	5100±	千手観音の意	
05		パラ (ドルジェ・ポラ)	Pala Dorjepola	5750	男尊	
06	曲宗蔵布	シャハン	Shahang	5300±		2003 ウーバ村人
07	恩帕(恩巴)	ゴチェ	Goche	5387		
08	ウーバ	ソンド・パラ	Sondopalha	5300±	ウーバ村のユラ	
09	大興 ダシン	シャガポロ	Shagapolo	5210		大興村村長 ペンバ・ツェリン氏
10	古郷 ｸｰｼｬﾝ	ポリ	Pori	5309		古郷村人

標高は旧ソ連地図による

―― 崗日嘎布山群の山々(写真) ――

(渡部秀樹 撮影)

▲ルオニ峰とトーンのカルカ

▲ラグ村と10.ゴンヤダ、11.ゼ、21.ゲムソング、23.ノイ、12.ハモコンガ(ドジザンドイ)峰

▲米堆氷河と21.ゲムゾング、23.ノイ峰

▲4.ドジツェンザ

▲21.ゲムソング

▲6.ヒョン峰山頂

4. 米堆谷について

No.10309
中山　健

はじめに

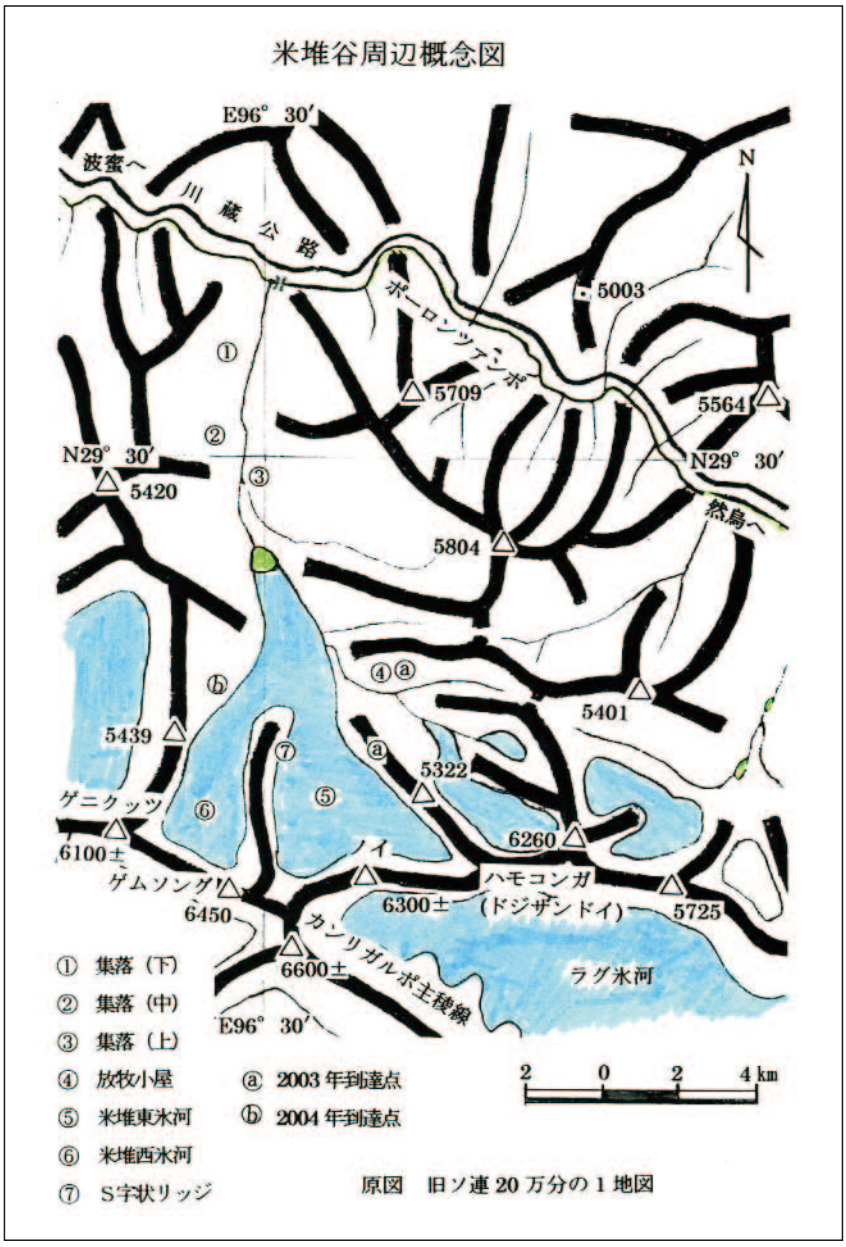
米堆谷は帕隆藏布上流の町然烏から西へ約３０ｋｍ帕隆藏布を下った地点から崗日嘎布山群の背梁へ向って南へ這入り込み、氷河湖まで約８ｋｍの比較的短い谷である。我々は２００２年～２００５年の間４度この谷に入り、周辺地形の解明、山名聞取りなどの調査を実施した。とくに２００３年には米堆氷河東側サイドモレーン上を、２００４年には西側サイドモレーン上を辿ってそれぞれ標高４５００ｍ及び４２００ｍまで達し氷河や地形の観察、源頭部に連なる峰の登路の考察を行った。この結果、谷最奥部の氷河、峰々の概要を掴むことが出来た。

１　米堆谷への道

然烏から車で川藏公路を松宗方向へ３０分程下ると、それまでのゴルジュが突然開ける。天気が良ければ南側谷奥にヒマラヤ襞の鋭峰が望まれる。米堆谷の入口である。逆に松宗方面から上って来る場合、米麦の部落を右に見た後、ゴルジュの中を走ること約１０分でここに到着する。帕隆藏布本流に架かるコンクリート橋を渡って谷に入る。道は４輪駆動車ぎりぎり巾の悪路であるが、快適なテント設営地、後述の「中の集落」付近まで３０～４０分で達することが出来る。ただし春から夏にかけての増水期には道の崩壊により車の通行が不能となることがあるようだ。我々もそのため徒歩で入った経験がある。

２　集落と住民たち

谷中には下流から順に上、中、下と三つの集落が右氷河の河岸段丘の上など高台の上にあり、それぞれ６戸、１０戸、７戸の家屋が建っている。木造２階建で大きく立派である。この他、谷の左奥後述のハモコンガと呼ばれるピークの麓に放牧小屋があり、夏期には村民の大部分がここに移住する模様である。この谷の人達は、閉鎖されたこの谷の中に代々住み近親婚を重ねてきたためだろうか、皆容貌が酷似している。また体の奇形、例えば６本指の手を見たこともあった。昔この谷は盗賊の隠れ家であったとのことであるが、人々は大変友好的である。２００２年春最初に入谷した際、荷物運搬について若干のトラブルはあったが、久方ぶりの外国人の珍しさもあってか、家に招き入れられツァンパやヨーグルトをご馳走になった隊員もいた。多くの村民が我々の焚木のために木を集めてくれた。



３　氷河とピーク

米堆谷の源頭には、１つの大氷河、米堆氷河と２～３の小氷河が存在する。谷正面の米堆氷河は上流部がＳ字状リッジにより２分され、左右の氷河にはそれぞれ落差８００ｍ、巾１ｋｍといわれる大氷瀑がある。両氷河はこの瀑の下で合流する。以下、谷奥に向って左側を米堆東氷河、右側を米堆西氷河と呼ぶこととする。谷奥稜線には６０００ｍ以上のピーク５～６座が連なっている。名前が判明しているのは、東からハモコンガ（６２６０ｍ）、ノイ（６３００ｍ±）、ゲムソング（６４５０ｍ）、ゲニクッツ（６１００ｍ±）である。その他旧ソ連の２０万分の１地図にゲムソングとゲニクッツ間に２座が表現されている。

●ハモコンガ（６２６０ｍ）

この谷の住民達が聖山としている山である。

米堆氷河東側のサイドモレーン上を登って行くと、東から流れ込む支谷の奥に、２～３本の小氷河が流下するドーム型の雪山とピラミット型の岩峰の連なりが見えてくる。この岩峰がハモコンガである。米堆氷河と南北隣合せの拉古氷河舌端の村、拉古村からもその鋭い姿が望まれる。拉古村住民はこの山をドジザンドイと呼んでいて、やはり神聖な山として崇めているようである。

●ゲムソング（６４５０ｍ）

この谷の主峰である。S字状リッジが源頭稜線へ立上った地点より少し西側に位置する。１９３５年７月、この谷に外国人として始めて入ったイギリス人ハンベリー・トレイシーがその著書「Black River of Tibet」で Majestic snow peak と称えたヒマラヤ襞を纏った氷の鋭峰である。村民はこの山をカンカーラモと呼んでいると記述している。鉾先を天に向け屹立する姿は、登攀欲をそそり印象的である。

●ゲニクッツ（６１００ｍ±）

米堆西氷河の最奥、最西端に位置する。同氷河のサイドモレーンから台形の頂上部分を見ることが出来る。基部からの全貌は確認できていない。

●ノイ（６３００ｍ±）

米堆氷河のエンドモレーン上からこの峰の北壁や米堆氷河の大氷瀑など北側の様相を一望出来るが、ピークの姿はゲムソングから東に延びる源頭稜線の一突起すぎない感じである。一方、南側拉古村から遠望する姿は東側に大きな岩壁をもつ立派なピークに見える。

おわりに

岡日嘎布山群は未だ探検、探査すべき領域が残されている世界でも数少ない地域の一つであろう。多くの峰は手付かずであり、帕隆藏布に流れ込む谷も殆ど未解明のままである。このような中にあって、我々がこの米堆谷の探査をおこないこの谷について多くの知見を得る事が出来たのは大変幸いな事と思っている。

5. 岡日嘎布山群に関係した福岡支部会員の 2006 年春までの発表記録

No.4607
松本　徨夫

福岡支部は、岡日嘎布山群の踏査を 2001 年（第 1 次）から 2005 年（第 5 次）にかけて、毎年行なってきた。その他にも、2004、05 年 8 月の渡部らによる魯朗（ﾙｰﾅﾝ）までの植物観察、2004 年 6・7 月中馬らによる然烏（ﾗｳ）～魯朗経由のチベットの旅がある。また、2005 年 11 月の渡部、渡辺、足立らによるラサ～成都間の川藏公路の旅がある。この旅では通麦（ﾄﾝﾒｲ）～然烏間の通過だけでなく拉古（ﾗｸﾞ）を訪れ、聞きとり調査をしたが、その内容は第 6 次隊としてもよい成果である。

今回 5 年間の活動を、まとめるに当り、これまで支部報以外にもいくつか公表してきたので、関係したものを含めてリストとしてまとめた。

以下の報告にある山名同定表、山岳調査表、地図などに示された山名について一言する。山名調査は、現地の村人からの「聞きとり」である。そのため、発音とスペルなどに個人差がある。できるだけ正確を期したつもりであっても、翌年別の発音に聞こえたりする。あるいはこちらの聞きとりが悪かったり、印刷でのミスがあったりするので、その度に修正している。だから、山名などは古い地図より新しい地図がより正確である。それでも、さらに修正が必要になってくるだろう。

○日本山岳会福岡支部報

佐々木耕二（1998）「中国辺境・雲南最北の山旅日記（麗江納西自治県・迪慶チベット族自治州）」No. 11、P. 1 ～ 2.

倉智　清司（1998）「写真・梅里雪山山脈」No. 11、P. 3 ～ 4.

松本　徨夫（1998）「写真・玉竜雪山」2 葉、No. 11、P. 3 ～ 4.

（上記３篇はカンリガルポ山域ではないが、その後のカンリガルポ山行の出発点ともなるので、文献としてあげておく。）

中山　　健（2001）「雲南～カンリ・ガルポ～ラサの旅　2001 年 4 月～ 5 月」No. 14、P. 1 ～ 4.

松本　徨夫（2002）「東チベット・カンリ・ガルポ山群の地名など」No. 15、P. 2 ～ 9、山名同定表（2002, 7, 松本徨夫編）、地図 2 葉、（東部岡日嘎布山群、西部岡日嘎布山群、2002、Compiled by Y. Matsumoto.）

渡部　秀樹（2002）「岡日嘎布山群第２次調査」No. 15、P. 10 ～ 12.

福岡支部第３次隊（2003）「日本山岳会福岡支部・岡日嘎布山群第３次調査隊　ヒマラヤの東・カンリガルポ山群調査隊概要」No. 16、P. 9 ～ 10.

渡部　秀樹（2004）「2003 年第 3 次カンリガルポ調査の概要　カンリガルポ山群、未知の谷と未踏ピークの解明」No. 17、P. 1 ～ 4.

中山　　健（2004）「米堆谷」No. 17、P. 4.

松本　徨夫（2004）「東チベット・カンリガルポ山群の山名―とくに主稜の山峰群―」No. 17、P. 5 ～ 14、主稜山岳表、山名調査表（2003, 3, 松本徨夫・渡部秀樹編）、欧文地図 2 葉、（Eastern and Western Kangri Garpo Mts., Compiled by Y. Matsumoto, 2004.）

（上記 3 篇は「東チベット　カンリガルポ山調査特集」として、2003 年の山行を中心に編集された。）

辻　　和毅(2005)「灯台下暗し―文献探しに思う(カンリガルポ山群)」No.18、P.2 ～ 5.
渡部　秀樹(2005)「カンリガルポ山群、未知の谷と未踏峰の解明(2004)」No.18、P.5 ～ 9.
松本　徑夫(2005)「欧文地図2葉」(Extreme Eastern, and Bomi Xian and Surroundings, Kangri Garpo Range, Compiled by Y.Matsumoto, 2004)、No.18、P.10 ～ 11.
松本徑夫・渡部秀樹・中山健(2006)「第Ⅰ部　岡日嘎布山群調査(第1次隊～第5次隊)特集」No.19、P.1 ～ 13.
辻和毅・松本徑夫・下田泰義(2006)「第Ⅱ部　岡日嘎布山群第５次調査隊報告」No.19、P.14 ～ 20.

○山　日本山岳会会報(支部だよりを除く)
渡部　秀樹(2005)「2004第4次カンリガルポ山群調査」No.722(7月号)、P.5.

○Japanese Alpine News(JAC発行)
Matsumoto Yukio(2003)“２maps(Eastern Kangri Garpo Mts and Western Kangri Garpo Mts.)”Vol.4, P.92 ～ 95.
Matsumoto Yukio(2004)“Survey and Exploration of Kangri Garpo East-Identification of Peaks and Unveiling of Hidden Valley”with a map of Eastern Kangri Garpo(Compiled by Y.Matsumoto, 2004)“ Vol.5, P.50 ～ 56. And P.67(2 photo.s)
(松本・辻・渡部3名連名で投稿したが、JAN編者が松本1名の執筆者にした。とくに英文は辻が担当した。)
Matsumoto Yukio(2004)“Exploring Kangri Garpo Range 2004-Identification of Peaks and Unveiling of a Hidden Valley with 2 maps of Extreme Eastern, Kangri Garpo Range and Bomi Xian and Surroundings, Kangri Garpo Range(Compiled by Y.Matsumoto, 2004) ”Vol.6, P.90 ～ 94.and P.117(2 photo.s)
(松本・辻・渡部3名で作製したが、JAN編者の意向にそい、松本単独発表の形となった。英文は辻が担当した。)

○横断山脈研究会News Letter
渡部　秀樹(2003.12)「日本山岳会福岡支部・東チベットカンリガルポ調査隊」No.28、P.6
福岡・カンリガルポ山群調査隊2004(2004.12)「未探検域の全貌を解明」(渡部秀樹記)No.32、P.1.
松本徑夫・渡部秀樹(2005.3)「カンリガルポ山群、未知の谷と未踏峰の解明(2004年)」(第11回研究会で使われた資料として横断研事務局が掲載する。)No.2005、P.2.
松本　徑夫(2005.10)「カンリ・ガルポ山群第5次踏査」No.35、P.2 ～ 3.

○YunXiSi(ユンシス)横断山脈研究会会報
松本　徑夫(2003)「カンリ・ガルポ山群－とくに山名など(2001・2002年の踏査)」No.〔2003〕005、P.55 ～ 73.山名同定表(2002.7、松本徑夫編)；地図2葉(東部岡日嘎布山群、西部岡日嘎布山群、Compiled by Y.Matsumoto)
渡部　秀樹(2005)「カンリガルポ山群、未知の谷と未踏ピークの解明」No.〔2005〕007、P.1 ～ 6.
中山　　健(2005)「カンリガルポ山群、米堆谷の偵察」No.〔2005〕007、P.7.
松本　徑夫(2005)「東チベット・カンリガルポ山群の山名－とくに主稜の山峰群」No.〔2005〕007、P.8 ～ 23、主稜山岳表、山名調査表(2004.3、松本徑夫・渡部秀樹編)、欧文地図2葉((Eastern Kangri and Western Kangri Garpo Mts.、Compiled by Y.Matsumoto 2004)
(上記3篇は「2003年第3次カンリガルポ山群踏査報告　日本山岳会福岡支部」として編集された。)
渡部　秀樹(2006)「2004年第四次カンリガルポ山群踏査報告」No.〔2006〕008、P.1 ～ 8.
辻　　和毅(2006)「ヒマラヤの東・カンリガルポ山群東端の6327m峰」〔2006〕008、P9 ～ 17.

第Ⅱ部 岡嘎布山群第５次調査隊報告

1. 第５次隊の行程表

No.7698
辻　和毅

第5次岡日嘎布山群調査隊は夏季の植物観察を行なうため、岡日嘎布山群に入った。その行動記録は下記の通りである。

月日	行程		宿泊地	行動記録
7月24日	福岡～上海	成都	成都	中国国際航空CA916便、福岡発14.50
7月25日	成都	ラサ	ラサ	中国国際航空CA4401便、成都早朝発
7月26日	ラサ	八一鎮	八一鎮	3台のランドクルーザーに分乗、米拉山（メラ峠5030m）にて植物観察
7月27日	八一鎮	波密	波密	色季拉（セチラ4510m）、途上各所で植物観察
7月28日	波密	然烏	然烏	松宗にて朗秋村への道を探索、サルウィン川との分水嶺安久拉（ペイラ4415m）で植物観察
7月29日	然烏	徳母拉	然烏	徳母拉周辺と途上にて青いケシ、トウヒレンなど植物観察
7月30日	然烏	徳母拉	然烏	拉古村に行くも増水で通行不能、徳母拉周辺と途上にて植物観察
7月31日	然烏	波密	波密	1班は朗秋村に初めて入り、植物観察、2班は米堆村に入るも道路崩壊のため奥に行けず
8月1日	波密	魯朗	魯朗	土石流により古郷付近の道路決壊、易貢藏布をのぼり、易貢措下流端まで行く
8月2日	—	魯朗	魯朗	魯朗周辺と、トゥムバツェ村にて、サクラソウ、シオガマギクなど植物観察
8月3日	魯朗	八一鎮	八一鎮	色季拉（セチラ4510m）から北側山腹に登り、青いケシ、ダイオウソウなど植物観察
8月4日	八一鎮	ラサ	ラサ	途中各所で植物観察
8月5日	ラサ	成都	成都	中国国際航空CA4402便
8月6日	—	成都	成都	中国国際航空CA915便は上海に台風接近のため、欠航、再度ホテルに戻る
8月7日	成都～上海	福岡		中国国際航空CA915便は一旦離陸するが機体不具合のため、引き返し大幅に遅延

2. 第５次隊植物観察報告

No.4607
松本　徨夫・No.8523
下田　泰義

福岡支部は２００１年から毎年岡日嘎布山群に出かけている。発端は、中村保氏から情報を得た松本が「東チベット横断と拉古氷河」を強く希望し、渡部に相談してからである。第４次までは、主として未知の山名調査と山座同定、未探検の谷の偵察をやってきた。岡日嘎布山群を単行本としてまとめたいと思うようになってから、山名のみならず総合的に、とくに高山花を見る必要性を痛感していた。そこで、下田の都合から、2005 年 7 月 26 日～ 8 月 4 日の間、ラサからの往復として実施した。

目的はあくまで高山花卉（ｶｷ）（草花）の観察と撮影である。途上の米拉（ﾒﾗ、4930m または 5030m）、色季拉（ｾﾁﾗ、4510m）の両峠、キングドン・ウォードが「サクラソウの楽園」（Kingdon-Ward, 1926）と称した魯朗～トゥムバツェなどのお花畠は、通過時に観察できる。そのため徳母拉（ﾃﾞﾓﾗ、4920m）を最主眼においた。その理由は、１）岡日嘎布山群域内にあること、２）高度と地形から貴重な花卉の生育が推定されること、３）キングドン・ウォードは 1933 年 9 月にシュデンゴンパからサンガチュゾンを往復した。そのおり徳母拉近くのゾラを 2 度越えているが、花卉の記録がほとんどないこと（Kingdon -Ward, 1934）、などである。

結果として、おおむね満足すべき成果を得ることができた。拉古（ﾗｸﾞ）へは、ヤンツォ（最上流の然烏（ﾗｳ）湖）の増水で行けなかったため、徳母拉は２日にわたって行くことができた。ここでは２種のいわゆる青いケシ（*Meconopsis horridula,M.speciosa*）、雪蓮（*Saussurea tridactyla*）のほか、多数の花卉を観察できた。岡日嘎布山群域ではないが、米拉、色季拉では、セイタカダイオウ（*Rheum nobile*）、青いケシの 5 種、その他の花卉に会うことができた。各地のお花畠では、ウスユキソウ、メタカラコウ、アザミ、キオン、トリカブト、イチリンソウ、シオガマギク、リンドウ、サンプクリンドウ、フウロソウ、サクラソウ、ホタルブクロ、アカバナ、アヤメ、イブキトラノオ、ツリフネソウ、ウメバチソウ、ユリなど数 10 種の花を確認した。

紙面の都合で詳細は省略して表を示すにとどめる。植生に関係した垂直分帯は下記の 3 つの文献から松本がまとめた。主要樹木の分布は 5 次にわたる私たちの観察に加えて、徐ら（1995、1996）から作整した。樹木の自生高度は、私たちの観察と徐（1995、1996）から松本がまとめた。草本類の分布は、下田、松本が確認した花卉に加えて、渡部が確認した草本のみである。したがって、これ以上の草花があることはいうまでもない。

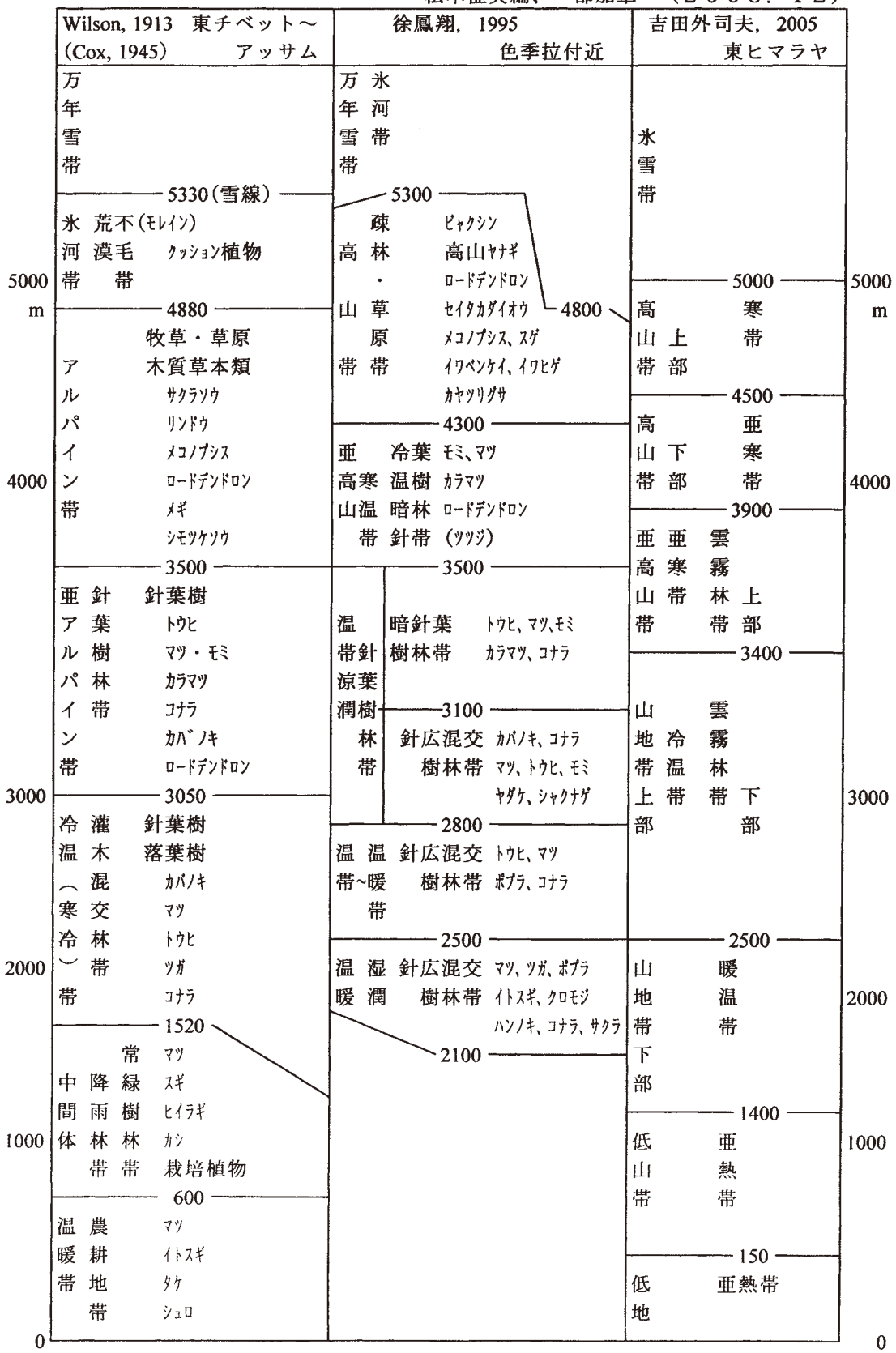
参考図書

吉田　外司夫　（2005）『ヒマラヤ植物大図鑑』山と渓谷社、800p.
徐　鳳翔、ほか　（1995）『西藏高原森林生態研究』遼寧大学出版社、308p.
徐　鳳翔、ほか　（1996）『西藏高原森林生態景観』遼寧林業出版社、135p.
徐鳳翔・鄭維列　（1999）『西藏野生花卉』中国旅遊出版社、120p.
Cox, E. H. M　（1945）Plant-hunting in China（A history of botanical exploration in China and Tibetan marches）. London, Collins, 230p.（これより Wilson, E. H. 1913 を引用）
Kingdon-Ward, F　（1926）The Ridde of the Tsangpo Gorges. London, Edward Arnold & Co. 328p.
Kingdon-Ward, F.　（1934）A Plant Hunter in Tibet. London, Jonathan Cape, 317p.

2.1 植物高度分布図

表Ⅱ-1　崗日嘎山群周辺の植生に関係した垂直分帯

松本徑夫編、一部加筆　（２００５．１２）



2.2 植物分類・産出表（草木・樹木）

表Ⅱ-2　崗日嘎山群および周辺域の主要樹木分布

松本僅夫・下田孝義 編（2005．12）

樹木名（中国名）	地名 / 高度m / 学名	尼洋曲 3050	林芝 3000	色季拉 3700～4200	魯朗 3500	東久 2500～2700	易貢 2300～2400	通麦 2100～2600	波密 2700～3200	松宗 3000～4000	然烏 3800	察隅 2300	墨脱 900～2400
針葉樹													
マツ科モミ属（急尖長苞冷杉）	*Abies georgei* var. *smithii*								●	●			
マツ科モミ属（冷杉）	*Abies georgei*			◎	◎				○	○	○		
マツ科ツガ属（雲南鉄杉）	*Tsuga dumosa*											○	●
マツ科トウヒ属（雲杉）	*Picea likiangensis*								●				
マツ科トウヒ属（林芝雲杉）	*P.l. linzhiensis*		●			○			●				
マツ科ヒマラヤスギ属	*Cedrus* sp.									○			
マツ科カラマツ属（西蔵落葉松）	*Larix griffithiana*				○				○	○	○		
マツ科マツ属（高山松）	*Pinus densata*	◎			○	◎	○	○	●	●◎			
マツ科マツ属（華山松）	*Pinus armandi*					○	○	○					
マツ科マツ属（雲南松）	*Pinus yunnanensis*											●	
ヒノキ科ビャクシン属（方枝柏）	*Sabina saltuaria*			◎									
ヒノキ科イトスギ属（巨柏）	*Cupressus gigantea*	●	○				●	○					
ヒノキ科イトスギ属（藏柏）	*C. torulosa*						○	●					
広葉樹													
クルミ科オニグルミ属（核桃）	*Juglans regia*		●										
カバノキ科カバノキ属（樺樹）	*Betula* sp.								○	◎			
カバノキ科ハンノキ属（檀木）	*Alnus nepalensis*					○	○	○					
ブナ科コナラ属（川濱高山櫟）	*Quercus aquifolioides*					●	○	◎	○	○			
ブナ科コナラ属（通麦櫟）	*Q. tungmaiensis*							●	○	○			
クヌノキ科タブノキ属（楠楠）	*Machilus* sp.							○				○	○
バラ科キジムシロ属	*Potentilla* sp.	○		◎	○					○	○		
バラ科バラ属	*Rosa* sp.			○	○				○	◎	○		
バラ科モモ属	*Prunus* sp.				○				○	○			
バラ科シモツケ属	*Spiraea* sp.				○					○			

○：普通に自生　◎：純林あり　●：巨木・古樹・保護木など　地名は周辺を含む

表Ⅱ-3　色季拉および周辺における主要樹木の自生高度

松本僅夫 編（2005．12）

樹木名（中国名）	学名	高度（×100m） 20 25 30 35 40
マツ科マツ属（薗松）	*Pinus griffithii*	
マツ科ツガ属（雲南鉄杉）	*Tsuga dumosa*	
ヒノキ科イトスギ属（藏柏）	*Cupressus torulosa*	
ブナ科コナラ属（川濱高山櫟）	*Quercus aquifolioides*	
ブナ科コナラ属（通麦櫟）	*Quercus tungmaiensis*	
モクレン科ハマビワ属（樣子）	*Litsea pungens*	
ヤナギ科ヤマナラシ属（長序楊）	*Populus pseudoglauca*	
カエデ科カエデ属（槭）	*Acer* sp.	
バラ科ボケ属（木瓜）	*Chaenomeles* sp.	
マメ科コマツナギ属（木藍）	*Indigofera* sp.	
ｽｲｶｽﾞﾗ科ﾚｲｾｽﾃﾘｱ属（風吹箭）	*Leycesteria formosa*	
バラ科サクラ属（桜）	*Purunus rufa*	
クスノキ科クロモジ属（三極烏薬）	*Lindera obtusiloba*	
マツ科マツ属（華山松）	*Pinus armandi*	
マツ科マツ属（高山松）	*Pinus densata*	
カバノキ科ハンノキ属（樺木）	*Alnus nepalensis*	
ヒノキ科イトスギ属（巨柏）	*Cupressus gigantea*	
ヤナギ科ヤマナラシ属（藏川楊）	*Populus szhechuanica*	
モクセイ科ソケイ属（素馨）	*Jasminum grandiflorum*	
ヤナギ科ヤナギ属（柳）	*Salix* sp.	
バラ科ナナカマド属（康藏花楸）	*Sorbus thibitica*	
ヤナギ科ヤマナラシ属（長序楊）	*Populus pseudoglauca*	
マツ科トウヒ属（雲杉）	*Picea likiangensis*	
マツ科トウヒ属（林芝雲杉）	*P.likiangensis* var *linzhiensis*	
ツツジ科ツツジ属（杜鵑）	*Rhododendron* sp.	
クスノキ科タブノキ属（潤楠）	*Machilus chayuensis*	
クスノキ科クスノキ属（聚花桂）	*Cinnamomum contractum*	
モクレン科オガタマ属（緑吐含笑）	*Michelia velutina*	
マツ科モミ属（冷杉）	*Abies* sp.	
マツ科モミ属（急尖長苞冷杉）	*Abies georgei* var. *smithii*	
クワ科クワ属（野桑）	*Morus alba*	
クルミ科オニグルミ属（核桃）	*Juglans regia*	
クルミ科ノグルミ属（光核桃）	*Pterocarya mira*	
グミ科ヒッポファエ属（沙棘）	*Hippophae rhamnoides*	
ニシキギ科ニシキギ属（衛矛）	*Euonymus tibeticus*	
マツ科カラマツ属（西藏落叶松）	*Larix griffithiana*	
スイカズラ科ｽｲｶｽﾞﾗ属（忍冬）	*Lonicera* sp.	
バラ科コトネアスター属（栒子）	*Cotoneaster* sp.	
スグリ科スグリ属（茶藨子）	*Tsuga umosa*	
ヒノキ科ビャクシン属（方枝柏）	*Sabina saltuaria*	

表Ⅱ-4　崗日嘎山群および周辺域の大樹

松本僅夫 編（2005．12）

植物名（中国名） 学名	生育地	高度（m）	胸高径（m）	樹高（m）	樹齢（推定年）
マツ科トウヒ属（雲杉） *Picea likiangensis*	波密崗郷	2750	1．8	66．5	
	米林	3100	2．98	－	
マツ科トウヒ属（林芝雲杉） *P.liki.* var *linzhiensis*	林芝八一	3025	3．20	63．0	2,500
	帕隆藏布	2800	2．30	72．0	
ヒノキ科イトスギ属（巨柏） *Cupressus gigantea*	尼洋曲	3050	4．20	51．0	＞2,000
ヒノキ科イトスギ属（藏柏） *Cupressus torulosa*	通麦	2200	2．00	60．0	
ブナ科コナラ属（川濱高山櫟） *Quercus aquifolioides*	東久	2550	1．30	24．5	
	尼洋藏布	3100	1．20	38．5	
ブナ科コナラ属（通麦櫟） *Quercus tungmaiensis*	易貢	2600	2．80	54．0	
マツ科モミ属（急尖長苞冷杉） *Abies georgei* var. *smithii*	帕隆藏布支流	2850	1．70	63．0	
マツ科マツ属（高山松） *Pinus densata*	帕隆藏布支流	2800±	1．30	60．0	
マツ科マツ属（雲南松） *Pinus yunnanensis*	察隅	2100	1．10	60．0	
マツ科ツガ属（雲南鉄杉） *Tsuga dumosa*	墨脱	2400	2．70	45．0	
ヤナギ科ヤマナラシ属（長序楊） *Populus pseudoglauca*	東久	2600±	1．20	40．0	

表Ⅱ-5　崗日嘎山群及びその周辺域の主要植物分布

下田泰義・松本徑夫 編（２００５．１２）

観察された主な植物	学　名	米拉 5013m	色季拉 4510m	魯朗 3400m	通麦 2080m	松宗 3100m	徳母拉 4810m
キク科ウスユキソウ属	*Leontopodium* sp.	○	○				○
キク科ヤマハハコ属	*Anaphalis* sp.	○		○		○	○
キク科メタカラコウ属	*Ligularia* sp.	○	○	◎			
キク科タンポポ属	*Taraxacum* sp.	○			○	○	○
キク科トウヒレン属	*Saussurea* sp.	○	○				●
雪蓮（トウヒレン属）	*S. tridactyla*		●				●
キク科シオン属	*Aster* sp.	○	○	○		○	○
キク科アザミ属	*Cirsium* sp.		○	○		○	
キク科オナモミ属	*Xanthium* sp.		○				
キク科ソロセリス属	*Soroseris* sp.		○				
キク科クレマントディウム属	*Cremanthodium* sp.			●			
キク科キオン属	*Senecio* sp.		○				
キンポウゲ科トリカブト属	*Aconitum* sp.	○	○	○		○	○
キンポウゲ科キンポウゲ属	*Ranunculus* sp.	○	○			○	○
キンポウゲ科カラマツソウ属	*Thalictrum* sp.		●	●			
キンポウゲ科バイカモ属	*Batrachium* sp.			●		○	
キンポウゲ科イチリンソウ属	*Anemone* sp.						◎
キンポウゲ科オオヒエンソウ属	*Delphinium* sp.					○	
キンポウゲ科ボタン属	*Paeonia* sp.			○			
ゴマノハグサ科シオガマギク属	*Pedicularis* sp.	○	○	◎			◎
ナデシコ科ノミノツヅリ属	*Arenaria* sp.	○					○
ケシ科メコノプシス属	*Meconopsis* sp.	○	●				●
メコノプシス・ホリデュラ	*M. horridula*	●	●				●
メコノプシス・スペキオサ	*M. speciosa*		●				●
メコノプシス・プライニアナ	*M. prainiana*		●				
メコノプシス・プセウドインテグリフォリア・ロブスタ	*M.pseudointegrifolia* Prain subsp. *robusta*		●				
マメ科ゲンゲ属	*Astragalus* sp.	○	○	○		○	○
マメ科オヤマノエンドウ属	*Oxytropis* sp.						○
マメ科ピプタントウス属	*Piptanthus* sp.			○	○		
リンドウ科リンドウ属	*Gentiana* sp.	○	○	○		○	○
リンドウ科ハナイカリ属	*Halenia* sp.			●			
リンドウ科サンプクリンドウ属	*Comastoma* sp.						○
バラ科キジムシロ属	*Potentilla* sp.	○	◎	○		○	○
バラ科バラ属	*Rosa* sp.		○	○		◎	◎
バラ科モモ属	*Prunus* sp.			○		○	

前頁の続き

観察された主な植物	学　名	米拉	色季拉	魯朗	通麦	松宗	徳母拉
バラ科シモツケ属	*Spiraea* sp.			○		○	
フウロソウ科フウロソウ属	*Ceranium* sp.		○	○		○	
スミレ科スミレ属	*Viola* sp.			○	○		
ユキノシタ科ユキノシタ属	*Saxifraga* sp.		○				
サクラソウ科サクラソウ属	*Primula* sp.		○	◎		○	○
プリムラ・グロメラタ 球形の花序(サクラソウ属)	*P. glomerata*	●					
サクラソウ科トチナイソウ属	*Androsace* sp.						○
ツツジ科ツツジ属(シャクナゲ)	*Rhododendron* sp.		◎			○	
ツツジ科ツツジ属(ツツジ)	*Rhododendron* sp.		◎				◎
ツツジ科イワヒゲ属	*Cassiope* sp.		○				○
キキョウ科ツルニンジン属	*Codonopsis* sp.		●			○	
キキョウ科ホタルブクロ属	*Campanula* sp.		●				
キキョウ科キアナントウス属	*Cyananthus* sp.			○			
アカバナ科アカバナ属	*Epilobium* sp.		○				○
アヤメ科アヤメ属	*Iris* sp.		○	◎			
タデ科ダイオウ属	*Rheum* sp.		○				
セイタカダイオウ(ダイオウ属)	*Rheum nobile*		◎●				
タデ科イブキトラノオ属	*Bistorta* sp.		◎				○
タデ科スイバ(ギシギシ)属	*Rumex* sp.			○	○		◎
タデ科オンタデ属	*Aconogonon* sp.			○	○		◎
ベンケイソウ科イワベンケイ属	*Rhodiola* sp.		○				○
オトギリソウ科オトギリソウ属	*Hypericum* sp.			○	○	○	
イグサ科イグサ属	*Juncus* sp.		●				
ムラサキ科オオルリソウ属	*Cynoglossum* sp.			○			
ツリフネソウ科ツリフネソウ属	*Impatiens* sp.			○			
シソ科フロミス属	*Phlomis* sp.	○		○			
シソ科イヌハッカ属	*Nepeta* sp.		○	○			
シソ科アキギリ属	*Salvia* sp.			○			
シソ科ムシャリンドウ属	*Dracocephalum* sp.						○
ウメバチソウ科ウメバチソウ属	*Parnassia* sp.			●			
スイカズラ科ニワトコ属	*Sambucus* sp.			◎	○	◎	○
ユリ科ユリ属	*Lilium* sp.				○		
トクサ科スギナ属	*Equisetum* sp.				○		
オオバコ科オオバコ属	*Plantago* sp.				○	○	
ジンチョウゲ科ステレラ属	*Stellera* sp.						○
ウラボシ科ワラビ属	*Pteridium* sp.				○	◎	

○：普通に自生　◎：群落　●：希種　地名は周辺を含む

2.3 特定の種の写真と説明

No.8523
下田　泰義

▲雪蓮　7/29　徳母拉　4700m

▲ツツジ群落
7/29　徳母拉　4700m

▲ボンボリトウヒレン
7/29　色季拉　4570m

▲イワヒゲ属カッシオペ・セラギノイデス
7/30　徳母拉　4700m

▲サクラソウ属
7/30　徳母拉　4700m

▲サクラソウ群落　プリムラ・フロリンダエ
7/31　朗秋村　3050m

▲シオガマギク属ペディクラリス・エルウェシー
7/30　徳母拉　4700m

▲シオガマギク属の大群落
8/2　トウムバチェ　3530m

▲イワベンケイ属
7/29　徳母拉　4700m

▲ステラ・カマエヤスメ
7/29　ウォルテ村　4500m

▲野生モモの大樹
7/31　朗秋村　3050m

▲マツタケ（手前）とニセマツタケ
8/2　魯朗　3400m

▲セイタカダイオウ
8/3　色季拉　4570m

▲セイタカダイオウ内部
8/3　色季拉　4570m

▲メコノプシス・シュードホリドュラ
8/3　色季拉　4550m

▲メコノプシス・プライニアナ
8/3　色季拉　4550m

▲ﾒｺﾉﾌﾟｼｽ･ﾌﾟｾｳﾄﾞｲﾝﾃｸﾞﾘﾌｫﾘｱ･ﾛﾌﾞｽﾀ
8/3　色季拉　4550m

▲チベット名　オマン
7/31　朗秋藏布　3100m

▲球状ｻｸﾗｿｳ　ﾌﾟﾘﾑﾗ･ｸﾞﾛﾒﾗﾀ
8/4　日多　4200m

▲メコノプシス・ホリデュラ
8/3　色季拉　4550m

▲メコノプシス・スペキオサ
8/3　色季拉　4550m

▲ヤナギラン
7/30　安欠拉　4100m

第Ⅲ部 福岡支部「中央分水嶺踏査」報告

中央分水嶺踏査担当 No.8125 副島　勝人

日本山岳会創立 100 周年記念事業である「中央分水嶺踏査」は全支部参加のもと着実に踏査が進み、2006 年 1 月 10 日現在で 91.3% の踏査完了となっている。

福岡支部の踏査地域は、平尾台(吹上峠)～竜ヶ鼻～味見峠～飯岳山～戸城山～岩石山～戸立峠～北坂本～英彦山～上塚山～ガラメキ峠までの約 42Km を７区間に分けて行うこととした。踏査は 2004,11,30 第２区間の味見峠～飯岳山から始まり第６区間の戸立峠～北坂本までの踏査状況については支部報 18 号で報告している。残りの第７区間北坂本～ガラメキ峠、第１区間平尾台～味見峠についての踏査概況を報告したい。

▲第７区間　　北坂本～英彦山～篭り水峠～上塚山～ガラメキ峠

この踏査区間は福岡県を代表する名山英彦山を中心に大分県側の踏査となり全踏査ルートのうち最もコースが長く取り付き地点も遠いため､4 月 19 日～ 20 日の二日間の日程で行うこととした。

○　第１日目　2005,4,19(北坂本～英彦山～篭り水峠)　天候　晴れ　　参加者(中山健､浦一美､松隈茂､川里弘孝､松本康司､深田泰三､江上清治､塩田重美､高木荘輔､竹原隆義､平山正明､淀川雅之､副島勝人)　宿泊　しゃくなげ荘

しゃくなげ荘に 13 名集合、北坂本の取り付き地点まで移動。神社入り口の道路から直登する。稜線を上がりこむとやや平らになり、歴史を感じさせる墓碑が無残にも倒れている所に出た。国道を横切り潅木地帯の明るく静かな木立のなかを楽しく歩く。県立青年の家から中岳への登山道に入るがスズタケの中の道は迷路のようになり薮こぎしながら中岳山頂に出て南岳に向かう。南岳からほぼ南に薮のなかを下る。途中の岸壁地帯は懸垂下降で通過。しばらく歩くと国土調査のペナントがあり踏み跡がある。1071m(鹿の角)からの岸壁は回りこみ篭り水峠に出る。本日はここまでとし下山、しゃくなげ荘に入る。夕食を兼ねた小宴会は懇親会ともなり楽しい時間であった。

踏査距離＝3.5Km　踏査時間＝9 時間

○　第２日目　2005,4,20(篭り水峠～上塚山～ガラメキ峠)天候　雨のち曇り　　参加者(中山健､浦一美､江上清治､塩田重美､松隈茂､高木荘輔､副島勝人､)　サポート(松本康司､深田泰三､竹原隆義､平山正明､淀川雅之)

夜半から強い雨そして福岡沖地震の余震と大変な日となった。雨の中鬼杉への登山口まで車で移動。篭り水峠に着く頃には小雨となり助かる。スズタケの中の分水嶺を歩く。猫の丸尾への道は明るい木立の中を歩く森林浴コース。石楠花の頭周辺は名のとおりシャクナゲが多く中には百年は経っていると思われる大木がある。991m 地点には大分と福岡の県境界杭があり江戸時代のものもある。これから分水嶺は南東方向に入り込み大分県側を踏査することになる。稜線は踏み分けがはっきりし歩きやすい。植林地帯では鹿除けネットが張られこれに鹿がからみ死んでいる。はじめて見る光景である、鹿の害は問題であるがいささかかわいそうにもある。上塚山は三等三角点がありハイキングクラブの道標も立っている。分水嶺の稜線は所々台風による風倒木に阻まれルートが不明になるが無事終了地点のガラメキ峠に出る､峠はガラメキ林道が通り開け地図上での確認に時間がかかる。

踏査距離＝5Km　踏査時間＝8 時間

▲第１区間　　平尾台(吹上峠)～竜ヶ鼻～味見峠

○　期　日　2005,5,24(火)　　天候　晴れ　参加者(中山健､浦一美､松隈茂､斉田貴典､大石義豊､塩田重美､副島勝人)

第１区間が最後になったのは、分水嶺上の三菱マテリアル内の通過が不明であったためであるが、会員の中馬董人氏の御尽力で敷地内への立ち入りが許可され今回の踏査となった。あらためてお礼を申し上げます。

吹上峠から踏み分けを登ると朽ちたフェンスがあり、太平洋セメント・住友大阪セメントのたて看板「無断立入禁止」である。ここは私有地､そして｢陸軍〇地｣の杭があり平尾台の歴史が偲ばれる。473.8m の山頂は平らに削られ三角点の標石は不明。しばらくすると住友セメントの社員が車で現れ注意を受ける。分水嶺らしきところは石灰岩の採掘現場で広大な広場となっている。これでは分水嶺踏査はとても無理である。三菱マテリアルでは事前に許可を頂いていたため順調にいき敷地内は竜ヶ鼻の取り付きまで車で送っていただいた。それにしても考えられないほど広大な石灰岩の露天掘り現場である。竜ヶ鼻への登りは激しい薮こぎとなった。下りは切り落ちた斜面の石灰岩の間を抜けながら下る。国土調査の杭があり踏み跡がかすかに残る稜線や送電線の点検道を伝い味見峠に下る。福岡支部担当の分水嶺踏査の終了である。

踏査距離＝5.5Km　踏査時間＝７時間

◆分水嶺踏査を終わって

北は北海道・宗谷岬から南は九州・佐多岬まで全長約 5000Km の日本海と太平洋を分かつ中央分水嶺を一本の線で繋ぎ歩く、踏査する 100 周年記念事業。踏査区間が最も長いのが北海道支部の 1165Km、一番短いのが静岡支部の 21Km、福岡支部は 42Km で四番目に短い距離である。42Km を７区間に分け延べ８日間 48 名の踏査となった。福岡支部担当の分水嶺ルートを概観すると大きく三つに分けられると思う。まず、天然記念物で国定公園となっている平尾台ルートしかし分水嶺は産業開発地域の中をとおりそこは石灰岩の採掘が進みカルスト台の景観が大きく変化している。次に、障子ヶ岳頂上の牙城跡、さらに岩石城と平安末期から戦国時代の歴史を秘めたルート。そして山岳宗教の霊山であった英彦山と山伏の峰入りコース。標高が低く薮山が中心の分水嶺であったが、自然景観、歴史への誘い、山岳宗教の神秘さと変化のあるコースでもあった。もし出来るならば、分水嶺ハイキングコースとして整備できれば日本山岳会 100 周年事業として有意義なものではないだろうか。

2004 年 11 月 30 日から 2005 年 5 月 24 日まで月１回の踏査を会員皆様のご協力を頂き無事終了することが出来ました。厚く御礼申し上げ報告を終わりたいと思います。ありがとうございました。

第Ⅳ部 会 員 活 動 報 告

ベトナム最高峰ファンシーパン(3143m)登頂記

No.12920
高木　荘輔

日本ベトナム友好協会が、両国の国交樹立 30 周年を記念して、ベトナム最高峰のファンシーパン山（3143m）に登山隊を送るという話を聞き、私の勤めていた民間放送仲間の知人の紹介で、部外者の私も加えて貰うことになった。

聞くところによると、ベトナムには長い間「登山」という習慣がなく、山岳地帯は、54 にも及ぶ少数民族（言語もベトナム語とは違う）の生活圏の一部になっているそうだ。とくに夏季の登山は厳しく、密林の中の樹々から人の血を吸うヒルが落ちてくるし、蚊も多くてマラリヤの多発地帯として知られている。それに山猫や熊、虎も出没するという説もある程だ。

外国人によるファンシーパン登山の記録を現地で調べた人によると、1990 年頃オーストリアの登山家 2 人が、大きなリュックをかついで、ガイドなしで頂上をめざしたが、途中で道に迷い、不成功のまま反対側のライチャウ省に下りたそうだ。ホテルの捜索依頼で何日間もヘリコプターが飛んだと言う。つづいて 1992 年頃、ロシアの登山隊 10 人程が、案内人も雇って同山をめざしたが、山中で隊員の 1 人が盲腸炎にかかったため隊は登山を中止。病人を急いで下山させたが、その人は亡くなったそうだ。最初の成功は、1994 年 1 月に登頂した日本の田部井淳子隊と見られている。十数名でガイドとポーターをつけて登山。この時は、鉈で密林や竹藪を切り開きながらの登山で、その時ポーターを務めたホアさん（ザイ族・42 才）が、今回私たちの隊のガイドとして主導してくれた。

この田部井隊の成功に刺戟されて、2000 年 1 月、日本ベトナム友好協会隊 5 名が、ガイド、通訳、ポーターなど 8 名をつけて登頂に成功。この時の隊長 S さんが、今回、私が加わった第 2 次隊を組織して、再び挑むことになったわけだ。

時期は、本隊が 2003 年 12 月 27 日から 2004 年 1 月 5 日までの 10 日間、あとで加えて貰った私は、同じ航空機が取れなかったため、1 日先に発ち、1 日あとに帰ってくるというスケジュールで 12 日間を要した。編成された登山隊は、すでに登頂経験のある S さんをリーダーに全部で 7 名。12 月初めに大阪近郊の金剛山（1125m）に集結し、登山と併せて計画内容や団体・個人装備の打合せ、点検、料理実習訓練などを行なった。

以下は、私の行動を中心にした記録からの報告である。

●12 月 26 日　晴

朝 8 時 20 分、日本航空で福岡空港を出発。1 時間で関西空港着。ベトナム航空に乗り継ぎ 6 時間でホーチミンのタンソンニヤット空港へ。さらに国内便に乗り継ぎ 2 時間、ハノイのノイバイ空港へ着いたのは、19 時 15 分だった。日本この時差は、マイナス 2 時間。

さっそく日本語通訳のベトナム人青年テーさん（25 才）が出迎えてくれ、ハノイ市内のレストラン「ブラザーズ・カフェ」で一緒に夕食後、私はホアビン・ホテルに泊まった。テーさんの日本語があまりに上手なので、日本に留学したことがあるのではないかと思って尋ねたこころ、「とてもそんなお金はありませんよ。夢は持っていますが」と言うこと。ホーチミン市内の日本語学校で 2 年間学んだだけというのには、ビックリした。

●12 月 27 日　晴

本隊が夜着くので、この日は、通訳のテーさんと終日、ハノイ市内を観光。ホーチミン廟や旧住居、文廟、軍事博物館などを見てまわる。しストラン「ナムフーン」で昼食後はシクロ（後ろから目転車でこぐ人力車）に乗り、旧市街を見物。フランス風の建物が目立つ古都（首都）は、新年を迎える準備で活況を呈していた。

19 時 30 分、ハノイ・ノイバイ空港で、日本から着いた本隊を出迎え、合流。長旅なのに休む間もなく、街の食堂で、簡単な夕食「フォー」（日本のうどんの様なもの）を食べたあと、ハノイ駅に車で駆けつける。22 時 10 分ハノイ駅発、中国国境に接するラオカイへ向かつて北上する夜行寝台列車に乗り込む。車掌がペットボトル入りの水とパンを配ってきたが、そのまま寝込んでしまった。

●12 月 28 日　曇り

8 時、列車はラオカイ駅のホームにすべりこむ。約 10 時間の列車の旅だった。気温 16 度 C。駅前の食堂でフォーやチャーハンで朝食を摂り、中国との国境の橋（モイ・キエウ橋）に行き、辺りを散策。狭い紅河をはさんで、向こう側が中国雲南省の町、河口。様子が手に取るように見える。時間にあまり余裕がないので、さっそく車で登山基地の町サパへ向けて出発する。西へ 1 時間余り山道を走ってサパ到着。サパ・ロイヤルホテルに落ち着く。サパは、フランスの植民地時代、フランス人が避暑地として開発した町で、中央部にある教会と広場の回りには、ヨーロッパ風の建物が散在し、ホテルやレストラン、みやげもの店などがいくつも見受けられる。

町のまわりは、少数民族の生活圏で、美しい棚田や山々の中に集落が点在する、のどかな農村風景が広がる。町は、独特の藍染めの衣裳や被り物を身につけた少数民族の女性の物売りで溢れていた。
登山のガイドを務めてくれるホアさん（ザイ族）と行動日程や運んで貰う荷物（テント・食糧など）の打合せをしたあと、町を散策。さらに足慣らしを兼ねて、近くのハムロン山に登ってみる。奇岩の群れの間を辿り、頂上に立つと見下ろすサパの町が大変美しい。一瞬、雲の切れ間から、はるか遠くに夕陽に輝くファンシーパンの山並みが見えたのには感激した。往復約 2 時間の山行だった。

▲登山基地サパの町の風景

●12 月 29 日　曇り

6 時起床。ホテルのレストランでフォーとコーヒーの朝食を摂ったあと、サパの生鮮市場にかけつけ、登山中の食材として食肉や野菜・果物類を買い付ける。8 時には、ホテル前で、体力に自信がなく残留を決めた 2 人を除く 5 人の隊員と登山ガイドのホアさん（ザイ族）、日本語と少数民族語の通訳テーさん、ポーターのルーさん（黒モン族）ら 6 名、計 13 名が勢揃い。8 時 30 分、サパ（1560m）を徒歩で出発した。先程買物をした市場の雑踏を通り抜け、1300m の谷底にあるモン族のカットカット村へ Z 状のジグザグ道を下ると 1 時間程で、最底部の谷川に到着。つり橋で渓流を渡り、登りになる。小高い丘の広場で休憩。谷川を何度か渡渉しながら尾根の山腹に取りつき、やがて林の中の登りになる。まわりの木々は、樫を中心にズオイという名のブナに似た木や竹がほとんど。花はあまりないが、草やシダの類が沢山あった。途中で、野性の黄色いトマト（毒性あり）の群落を見つけたりもした。12 時になったので、谷川（1700m）の岩の上で昼食にする。ポーターたちは神業ともいえる薪での火起こしで自分たちの食事を作って食べ、私たちは、市場で買ってきたヴァイン・チュン（もち米の中に豚肉と緑豆などを入れ葉に包んで蒸したもの）とバナナを食べる。1 時間後出発。川を渡り急斜面を登り、アップダウンを繰り返しながら、だんだん高みへと進む。

▲登山基地第1日目のテント宿営地

▲目前に迫ったファンシーパンの頂上（中央部の上）

15 時すぎ、最初のテント宿営地（2135m）着。大きな木の林に囲まれた平地で、小川も流れている。テント 2 張を張り、火を焚き炊事。夕食のメニューは、リンゴ酒、牛肉のバーベキュー、キャベツ、じゃがいも、鰯の干物、ご飯、コーヒーだった。

ポーターたちは、全員鉈を身につけており、すばやく倒木を削ってまな板にし、火を起こし、何かを料理して食べている。リーダーのSさんによると、先回の時は、穴ぐらからネズミや穴熊を捕まえてきて、それらを料理して食べていたそうだ。夜も、ビニールのシートを全員の上に掛けただけで寝ていた。履物も、ガイドのホアさんが簡素なズックを履いているほかは、みんな裸足にゴム草履かサンダル。あれで密林の中の急坂や岩の上を、重荷を背負って早足で歩き回るのだから、まったく屈強な山の民と言うべきだろう。19時30分就寝。時々雲はかかるが、密林の中から見上げる月と星が、とても美しかった。

●12月30日　曇り

6時起床。火を焚き炊事。ご飯と味噌汁、魚の缶詰で朝食を摂ったあと、テントを撤収。8時出発。いきなり木の根や岩をつかみながらの急な登り。途中、モン族が栽培している大きなショウガ状の木（タオ・コア）の畑があった（2210m）。実が漢方薬の原料として中国へ輸出されるそうだ。密林の中を歩くので、時々方向確認のためポーターが、素早く高い木に登り、位置を確かめながら進む。やがて密集した小笹の林の中の急な登りになる。分けても分けても竹の林。細い竹を束ねてつかむうち、白い手袋も苔で真っ黒になり、擦れて破れてくる。11時5分、私たちが「支尾根の鼻」と呼んでいる大きな岩のピーク（2605m）に着く。見晴らしが良く、サパの町やこれから目指す2935mのピークが見える。あたりに植生するシャクナゲ（蕾状）の群落が目を楽しませてくれた。12時10分、途中の小広場（2730m）で昼食。お握り2つと缶詰、バナナ1本。やがて稜線のコルを経て2935mのピーク地点に着く。ここからファンシーパンの頂上が見えてくるはずだが、霧のため視界が悪く、かなわなかった。ピークを過ぎると竹の林の急坂をいったん南へ下るが、苔のついた岩がよく滑って歩きにくい。16時20分、密林の中の小平地、2日目のテント宿営地（2760m）に着く。ポーターたちが、素早く小笹を切ってきて、テント場に敷いてくれる。薪での火起こしや倒木でのまな板作りも手伝ってくれた。「気はやさしくて力持ち」の青年たちに感謝。夕食は、リンゴ酒、焼き鳥、カレーライス。20時47分就寝。

●12月31日　曇り時々晴

6時起床。朝食はご飯と味噌汁にソーセージとかき卵。テントは帰りに撤収予定で、7時30分出発。歩き始めて15分後位に、林の中からファンシーパンの頂上とそれに連なる山なみが見えてさた。休憩を2度取り、竹林とたたかいながらの登り。時々草つきの道に出ると頂上がすぐそこに見えてきた。密生した林の中を何度もくぐりながら登って行くと、突然、パッと明るく開けて、頂上（3143m）に到着。10時35分、ベトナムの最高峰にやっと辿り着いたのだ。

▲ファンシーパン頂上で、ガイドのホアさん（左）と筆者

頂上の岩場の上には、四角錐の金属性標識が取りつけられていた。私たちが作って持っていった木板の標識も一角に置いてきた。晴れていて見晴らしが良く、360度の展望も満喫。雲海のかなたに中国やラオスの山々、はるか下にサパの町も展望できた。みんな記念写真を撮りあう。がイドのホアさんが持ってきてくれた、ベトナムのシャンパンを抜いて登頂を祝った。頂上の気温は4～5度位。モン族語でファンシーパンは、「極寒のところ」という意味だそうだ。

名残を惜しみながら、11時23分頂上を出発して下山開始。登路をそのまま引き返し、13時50分、テント場着。食事作りのため先発していたSさんとIさんの2人が作ってくれていた昼食の卵かけ味噌おじやを食べて、テントを撤収。14時35分出発して下山を続ける。2935mのピーク地点を経て、16時57分、テント宿営地（2700m）着。夕食は、大晦日なので年越しそば。強風のため焚火や炊事がスムーズに出来なかった。20時30分就寝したが、風が強くゴーゴーという音が凄かった。テントが吹き飛ばされそうで一晩中眠れなかった。

●1月1日　晴のち曇り

6時起床。風が強いため炊事が出来ず、非常食を軽く食べ、お湯を沸かして水筒に詰めるのがやっと。ここでは、どんなきれいな水でも蚊の卵がいるため、煮沸しなければ飲めない。テントを撤収。6時43分、全員で元旦の初日の出を拝む。6時45分出発。暫ら

く下り、最後に少し登って「支尾根の鼻」(2605m) の岩場を通過、さらに笹の林の中の急な下りを経て、8 時 28 分、風のない凹地に着き、火を焚き炊事。リンゴ酒を酌み交わし、新年を祝う。メニューは雑煮とコーヒー。

9 時 50 分出発、樹林の中の急な下りのあと、登路の第 1 キャンプ地 (2135m) 着。小休憩後、さらに下り続け、渓谷の渡渉を終えて、軽い昼食とコーヒー。白い野性の椿、栗、松、樫などの木々の中、尾根の山腹を谷川に沿って下り、今度はその川を渡って、対岸を登り返し、見晴らしの良い小広場で休憩。紫の花「インディゴ」の花畑や棚田が現われ、散在した農家の犬が吠えている、のどかな風景の中を歩いて行く。

15 時 30 分、黒モン族のポーター頭ルーさん (25 才) の家に到着 (1330m 地点)。今晩は、ここで泊めて貰うここになった。ルーさんの家は、奥さんや 3 人の子供たち、両親などを加えて 9 人家族。犬、猫、豚、水牛、鶏などが家族の一員のように、ほとんど放し飼いにされていた。水道や電気、トイレなど一切無く、窓も 30 ㎝ ×60 ㎝位、板壁を一ケ所切り開けてあるだけで、中は真っ暗。土間の囲炉裏に薪をくべ調理。生きた鶏をルーさんにさばいて貰い、「鶏うどん鍋」を作る。ローソクの灯りの中、リンゴ酒で乾杯して夕食を摂る。登頂を終えて気持ちもくつろぎ、ガイドのホアさんやポーターたちも交えて、団欒が続く。夜は土間に藁とシートを敷いて貰い、その上で寝袋に入り就寝。

●1 月 2 日　晴のち曇り

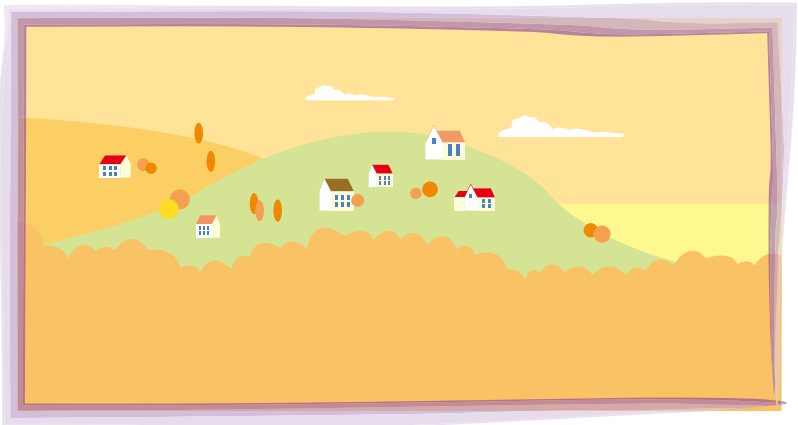
明け方、家の中の雄鶏の鳴き声で目を覚ます。こんな経験は、いつ以来だろうか。お茶を沸かし、各自簡単な非常食で朝食を済ます。ルーさんの家族の方々やガイド、ポーターたちと記念写真を撮ってお別れ。8 時出発。黒モン族の集落を抜け、あとは登山基地サパへ向けて、ひたすら登るだけ。9 時すぎ、サパ・ロイヤルホテル着。シャワーを浴び、着替えなどしてサッパリする。

▲黒モン族の家に泊めて貰い、出立する朝、家族らと記念撮影

11 時、ホテル近くの「チャパ・レストラン」に今回のガイドとポーター 8 人全員を招いて、お礼の宴会を催す。ビールや地元特産のもち米焼酎を飲みながら、ベトナム料理のフルコース。乾杯を繰り返し、登山中の話題に話がはずむ。スタッフ全員に日本から持つできた記念品を贈呈。中でもリーダーの S さんが、自分のテントをガイドのホアさんに贈ったのには、拍手喝采。大いに喜ばれた。

これで、ベトナム最高峰ファンシーパンの登山を無事終了。天候に恵まれ、日程も順調に消化したため、翌日からは、ラオチャイ村 (黒モン族) 訪問、ハノイ市観光、ホーチミン市観光に、それぞれ 1 日ずつを当て、1 月 6 日、無事、福岡に帰り着いた。

(以上)



●ファンシーパン登山地図

《編集後記》

桜の開花便りもあちこちから届く心地よい時節となりました。本報も盛り沢山の内容で会員の皆様にお届けできることを嬉しく思います。まず 5 年にわたる崗日嘎布山群の調査をまとめました。2001 年以来参加した会員は延べ 37 人に及び、成果は全国の関係者に認められています。未踏峰・未探検の山群に今後どう挑戦するか、会員の一層の奮起が求められます。高木会員によるベトナム最高峰の登頂記は珍しい記録として残るでしょう。中央分水嶺踏査は JAC 行事の完結編です。ご協力有難うございました。最近英国の探検家の本を読んで、彼らの記録に対する強い意思、目線の確かさを感じます。書いて考える姿勢は大いに学ぶべきと改めて思いました。皆さんも原稿紙やパソコンの前で一篇をつづってお送り下さい。新しい旅や発見が芽生えるかもしれません(A. B)

発行者：中山　健
編集者：辻和毅・倉智清司
発行日：2006年(平成18年)
4月15日
発行所：社団法人
日本山岳会福岡支部
〒811-1302
福岡市南区井尻5-6-14-201
渡部秀樹 方
TEL/FAX 092-592-8170